
まぐろ剣士 -弱者の反撃-

ゆり†

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まぐる剣士 - 弱者の反撃 -

【Nコード】

N0460K

【作者名】

ゆり+

【あらすじ】

あるサイトで書かせていただいている
まぐる剣士をこのたびはここで書かせていただくことになりました
あらすじは、プロローグを読んでいただければわかると思います
もし気になった方は
どうぞ
読んでみてください

ブログ

- 2008年 - 8月16日 - 夏 -

これは去年、今でも忘れられない物語
中学三年生の私の夏休みのお話

私はおにいと一緒に久しぶりに海に遊びに来ていた

世間では夏休みど真ん中のこの日

夏らしい青く広い空は綺麗に晴れ渡り、ジンジンするほどの日差しが身体に注ぎ込む、そんな日

私は本当に海に来るのが久しぶりで、楽しくてうれしくて

でも、そんな楽しい夏休みの思い出になるはずだったこの日、…私は海で遭難し…

…‘死んだ’…

そう、本当に…意図も簡単に私は死んだ…

夕暮れどきになって夏休みということもあつて、あれだけ日中は賑やかだった海や砂浜も、辺りに人がいなくなつて、おにいも帰りの準備をしているのが見えた、しかし私はそのときはまだ海の中で遊んでいて

夢中になっていたせいか、気がつけば、私は遠い遠い海の中に一人ぼっちになっていた…

それからどのくらいの時間が経ったのだろう、泳いでも泳いでもおにいのいるところに辿り着けない、いや…それどころか、もうどっちに泳げばいいのかもわからないほど遠い海の中にいた
日が完全に落ちた頃、深く暗い重い海の底に、とうとう意識がもうろうとなりかけ、体力も力尽き、ゆっくり…波に揺られながら沈んでいく私の身体…

頭が真っ白になるような真っ暗になるような感覚、痛みも水の冷たさももう…なにも感じない

あるとき…確かに力尽き、私が失った命はあったはず…
そこで私は死体になったんだ

しかし、それは偶然だったのだろうか、必然だったのだろうか…
泡に飲み込まれていくかのように沈んでいく私の身体を海の底から猛スピードで近づいてくる‘何か’が死んだ私を助けてくれた
形を一瞬だけ見れたそれは、人でもない魚でもない動物でもない‘何か’だった

…結局、そこで私は目を閉じてしまった…

次に私が目を覚ましたのはどこかの病院のベットの上だった

死んだと確信していた自分が、まだ…生きていることに全く実感がわかなかった…

だが、まだかすかにぼやける視界の先に
ただ、おにいの泣き顔とも見える笑顔を見たとき、本当に助かったんだと、…その瞬間、私も自然と涙が溢れてきた

これは二度目の命の代償なのだろうか、私にはしばらくして二つの変化が生じた

事故から数週間後したある日

夏も終わり、退院した私は何事もなかったかのように普段の生活に戻っていた

いつもの当たり前の授業中、ふと外に意識を向ければ微かに秋の匂いを感じれるような季節

そんなある日、朝から気分が悪くて、ふと温度計で体温を計ったときのことだった

入院中の検査では何の異常や異変もなかったはずの私の身体は、このとき何の前触れや前兆もなくいきなり変化が訪れた

…これが…私の変化の一つ目

？ ‘体温が普通の人間では考えられないほど低い身体になってしまっていたこと’

普通の人間の体温は低くても35 程度が普通である

しかし、私の身体は…30 が平熱の身体になっていた、何回何十回と計っても結果は同じ…

だからといって、特に病気になるわけでもなく自分で感じる身体の異変もなく、むやみに誰かに触れられなければ驚かれたりする問題もなく、そんなに普段の学校生活でも支障はないと、…そう思っていた

二つ目は

？ ‘まぐろの存在’

体温の変化に気がついて間もない時期にもう一つの変化は起きた

夕方、学校から帰ってきたその日、…何の前触れもなく私の部屋にあるはずのないものが横たわっていた

普通にはないもの

普通の人間なら絶対驚くもの

きっと私も昔の自分なら、それを見て腰を抜かすほど驚いていた状況だったはず

しかし私には、目の前のそれを見ても、どうしても…動じない理由

があつた

なぜなら、私が‘それ’を見るのが初対面ではなかったから…

あの事故の日、海の底から私を助けてくれた、人でもない魚でもない動物でもない‘何か’

一瞬だけ見れたその姿、まさにそれこそが、今、目の前に横たわっている紛れも無いこれだったのだから

そして、その正体は…‘まぐろ’

世間ではそう呼ばれる、ただの魚

しかし私からすれば、これは命の恩人であり…ただの魚なわけがなかった

見た目は小さめとはいえ、まさに今さっき泳いでいた状態のような姿のままのまぐろ一匹が横たわっていた

そのとき切羽詰まった中学三年生の私の感情の中には、…どうしても、これを隠さなければならぬ、という感情しか身体を働かすことはできなかった

それは、まるで死体を隠す子供のように…

小さめとはいえ自分の身長、152センチの小柄な身体と同じ大きさ程のまぐろを、おにいが帰ってくる前に、すばやく全体にバスタオルを被せ、まぐろの両端を紐でぎゅっと縛り、尾だけが剥き出しの状態のまま、自分の部屋の押し入れにしまい込んだ

…今思えばおかしい話だが、押し入れにしまい込むときに、ゆうに100キロ以上するであろうまぐろを、私が片手で掴むことが出来たことはやはり普通の魚のまぐろではありえないはずのことだったのだろう…

‘体温とまぐろ’

この二つが、…今、私の二度目の命とともに得てしまった二つの代償

そして現在、高校生になった私は、つい昨日高一の夏休みを終えて
今日からまた、普通の子とは…少し違う私の新学期が始まるうとし
ていた

第1話

- 2009年 - 9月1日 - (月) -

「はあゝ… 眠いゝ…」

秋の朝とはどうしてこんなにも眠いのだろう

私の名前は小林 ゆり

去年まで普通の中学生だった私は、普通ではありえないことを経験したが…、なんとか今は立派に高校生になった

私の高一の夏休みは昨日であつという間に終わり、今日からまた学校が始まった

「もう 7時… 起きよう…」

もぞもぞと、ぬくぬくのベッドに今日も別れを告げ、制服に着替え始める

まだまだ、夏休みが終わつたとはいえ朝から暑い今日は新学期の9月1日

パジャマをするすると脱ぎ、制服のブラウスに腕を通すときのちよつとひんやりした感じが気持ちのいい季節の朝

私の家には普段は唯一の家族でもある、おにいがいる

まあ… 今は、なにやら美大の何がどうかで昨日から「一ヶ月くらい友達と一緒に出かける」と伝言メモを残して不在中

一軒家に新学期の朝から一人で朝食を食べているのは、ちょっと寂しい気持ちにもなるけれど、一ヶ月も一人で好き放題できるのは悪くない気分

洗面台で歯磨きをしながら、ふにやふにやになっている寝ぐせを直す

私は友達が少ない、唯一の友達にチョコレート色と言われ続けている茶系色の混じった私の黒髪は、小学生のときから伸ばし続けて今では背中ほどまである

そしてそれが終わって、携帯の時間を確認する…7時45分
この決まった時間が私のいつも家を出る時間

私の学校は女子校で、家から学校まではノロマな私でも徒歩で15分で行ける距離にある

？なぜ自転車を使わないのか

という理由は、…苦手ということもあるけれど

私は朝、学校にぎりぎりの時間にせかせか早く行くよりも、のんびりでも歩きながら朝の空を見ながら行くほうが好きだから
朝の太陽の光に身体を暖められながら一緒に頭も起こして、その一日の気分と天気によって好きな曲をiPodで聞きながら、まったり通学する、このほうが私には合っている

学校に着いて2階の教室にトテトテ行く、私のクラス、1年E組の教室のドアの前、ここでドアをそーっと開ける、なぜなら、真っ先に来るのは…

… たった たった、ガバツ！

「… あう ！？」

（うう… やっぱり…）

新学期早々、教室に入っていきなり目の前が真っ暗になる

「ゆり〜 おはようっ」

「あ… おはよう 灯…」

雪村 灯 あかり 人見知りの私を唯一いじることのできる人間、そして、

私の唯一の友達…みたいな人

ぎゅっぎゅっ…ぎゅっ

「あの… 前が見えない…」

気がつけば、おもいつきり前から灯に抱き着かれていた…

「だからっ？ …ニヤリッ」

「えっと…だから どいてただけじゃないでしょうか…」

今の灯の顔は見えないものの、いつもどおりの私をいじるときだけ見せる、世界一とも思える満面の笑みでいるに違いない

「相変わらず、ちっちゃくて可愛いね… ゆり…」

「もう…っ 新学期早々、朝から邪魔…」

せつかく朝直してきた髪を雑にわしゃわしゃされて… ちょっと私も不機嫌になりかけはじめる

「ふう… しかたない はい…」

灯は大抵、この私が怒る一歩前で動作を止める

はあ… だからかなあ、…この人にはいつも負ける…

やっと視界が広がり、私の前にはやっぱり灯の微笑む顔があった
その柔らかくて明るい栗色のショートボブの髪に、ふわっとしたく
せつ毛が可愛い灯を見るたびに、…いつかはストレートの私もボブ
にしてみたいと思ったりする…

私と灯は10センチ以上身長差が違うため、立っているときはほとんど私が見上げる格好で話をしている、…単に灯の身長が特別高い
というわけではなく私がただちっちゃいだけ… (涙)

「ゆり…？ 髪ぐしゃぐしゃ…」

(自分がぐしゃぐしゃにしたくせに…)

「自分で直すから もうこれ以上触らないでね…」

そう言いながら私はそのまま教室の窓側の一番後ろ、…私の席に座る
「そつえばさー 今日の朝、BUMPのサイト見たら 更新されてたよー」

カバンから鏡を取り出して私が手ぐしで髪を直していると、灯も私の前の席に座る、私たちは夏休み前から席が前と後ろの関係にある
「新しい情報でもありましたか」

「うーん… あんましかなー ちょっと日記更新されてただけ…」

- B U M P O F C H I C K E N - 私たちの共通の好きなアーティスト

「そっかあ」

こうゆう灯の楽しそうに話すときの幸せそうにくしゃっと笑う笑顔を見た日は私もなぜかうれしくてつい微笑んでしまう

「ゆりー、今日の朝、テレビ見た？」

私が髪を直し終わると、急に話が変わる…

「えー？ 見てないけど…どうして？」

灯の話は小さい子供と話するときのように、ころころいつも突発的に変わる…

灯が話し、私が聞く、灯がいじり、私がいじられる…そんなのが私の日常

「なんとね、今日の朝、聖蹟桜ヶ丘の駅前がめざましテレビに出ちゃってたんだよー」

…聖蹟桜ヶ丘というのは私たちの住むこの街の地名

- 聖蹟桜ヶ丘 - 東京都多摩地区において、上品で落ち着いた雰囲気のある街並みと、多くの豊かな自然が育んだ貴重な風景は四季の移り変わりとともに表情を変え、坂の多いこの街から見える絶景や桜を見に来る人も多い、…らしい…

「そうなんだ… でも どうして？ なんかの事件？」

「んー… でもなんか 内容はよくわかんない感じだったよ」

そう言いながら、またうれしそうにくしゃっと笑顔を見せる灯…

「はあ…、話しのネタにするくらいなら、ちゃんと調べてきてよね

…」

「あれー、いいのかなあ…？、…そんなこと言うと、また髪の毛ぐしゃぐしゃに…」

ともあれば今度は…ドSの笑顔に変わる…

「う… わあっ、やめてっつ…」

やっぱり、いろんな意味でこの人には勝てないと思う…

「あ でも、確か…魚がどうか言ってたよ」

「さかな…？」

「そう、魚！」

「あのね…灯 今って聖蹟がニユースに出たっていう話だよね…？、夜ご飯の話じゃないよね…？ また話変わったの…？」

「なっ！、失礼なっ ちゃんとめざましでそんなようなこと言ってたんだから！」

「まあ… いいや…」

キーンツ コーンツ カーンツ コーンツ

朝からそんな矛盾な会話を灯していると、ちょうど朝のホームルームのチャイムが鳴った

ふと、黒板の横の時計を見るともう8時30分になっていたことに気がつく

チャイムが鳴ってすぐ担任の先生がガラッとドアを開けて教室に入ってきた

と同時に、灯の謎の話はそこでいったん終わり、灯も前を向いた

第2話

朝のホームルーム中、なにやら先生が色々と話している

：私のクラスの担任の先生はいつも比較的小声で話すため、席が窓側の一番後ろの私には外の雑音のせいでかなり聞きづらい…

集中して聞き取った一つ二つの単語で多分今日は始業式があるから、そのことを話しているんだと理解する

それだけわかると、私にとっては朝の10分間の短いホームルームが長く感じる

窓側の席というのはこういうときいいもので、軽く横に手を伸ばせばすぐ窓に手が触れることができる

そして私は音をなるべく立てないように…ガラガラッと窓を開ける秋空の綺麗な空と景色を感じていると、直ぐさまカーテンがふわりとなびく、それと同時に微かな秋の匂いを連れた涼しい風がクラス中を通り過ぎていく

(ゝゝ 今日も気持ちいい風ゝゝ)

そんな中、ふと私は灯の話が不思議というか…謎すぎたわけのわからない話を思い出した

…後で今度は私がいじってやるとそんな小さいな企みをこっそり考えながら、机の下で携帯のPCサイトビューアーを使って調べてみる私の携帯は開けるまでに二回の「カチッ、カチッ」という開閉音が鳴るため、わざとイスを少し後ろにひいて、イスと床との擦れるような、ガガッという音を使ってごまかしながら開く…

携帯とは本当に便利な物で、下手をすれば授業中、メール、ゲーム、PC検索、音楽アプリ、ワンセグ、…数え切れないほど高校生には暇つぶしには使い勝手がいいアイテムでもある

そして、いつもどおり上は静かで地味な優等生をしつつも、机の下

では早速PCサイトビューアーの検索ページを開く

灯が言っていた単語…

試しに「聖蹟桜ヶ丘」「魚」「ニュース」で検索してみる…

直ぐさま携帯の小さな画面にずらりと検索ヒットしたページが出てくる、そしてその一番上をクリックしてみる

しかし、そのページに書かれていたことを読んだ瞬間、私は、…数秒間…思考が止まった…、何かの衝撃でドクンツと自分の心臓が麻痺を起こしたかのような感覚…

…なぜなら、そこに書かれていた文章の内容が私が秘密にしている二つの代償のことを語っているかのような内容だったからである…「昨日の深夜、東京都多摩市聖蹟桜ヶ丘の駅前通りにて仕事帰りの男性が帰宅中、何者かに後ろから刃物で襲われ軽傷を負う通り魔事件が起こり

その被害者の男性の証言では、後ろから襲われた際に見た凶器が、形はあやふやだが魚のような形のものであったと証言していてさらにその際、驚いて抵抗した男性は犯人ともみ合いになり、犯人の腕を掴んだところ、犯人の腕は氷のように冷たかったとも証言している

犯人はその後逃走、まだ捕まっておらず、警察はこの証言や特徴も含め捜査中とのこと」

(…！？…ど、どうして…)

…氷ほど冷たい体温

さらには…魚

これはまさしく…

…焦った、この街に…私以外にも代償を持っている人が…ほかにもいるかもしれないことが…

(ゴクツ…)

携帯を持つ手が小さく小刻みに震える…、首筋からは何ともわからないような汗が出てくる…

（だ…大丈夫、だって…もし誰かに見つかったても、私は通り魔みたいに悪いことをしているわけじゃないんだから…）
気持ちを落ち着かせるために自分にそう念じる…

（大丈夫…大丈夫…）

…ふう…、少しは平常心に戻ったかな…

気がつけば、朝のホームルームは終わって、周りのクラスメイトは始業式のために体育館に移動し始めていた…

「ゆり〜、体育館行こう〜」

「…！？…あ…うん…」

あの記事を読んだ後だからか、…いきなり灯に声をかけられて…ついびっくりしてしまった

「どうしたのゆり？　というか…なんか少し汗かいてない？」

「ぜ、全然…っ」

「ほんとに…？　なんか怪しいよ…？　…ニヤリッ」

灯はまたあの私をいじるときだけ見せる笑顔で近寄ってくる…

「いやっ…ほ、本当に…っ　本当っ　ほら体育館行こう？　ね？」

そう言って無理矢理ごまかして、体育館に行く…

結局この後、灯が話していたあの通り魔の話はしなかった…、いや、正確には、…怖くてできなかった…

新学期始めのこの日は、始業式を含め二時間目の授業で下校だったため

11時頃には学校も終わった

「じゃあね〜、ゆり〜　また明日〜」

「うん…また明日ね〜」

灯とも門で別れ、私は一人下校中、内心は急いでいるものの、なるべく普段と変わらないように家に帰った

理由は…紛れも無い、通り魔事件のことが気になったから…

第3話

「ふう…」

学校から家に帰ってきて、ため息ともなんとも言えない言葉を吐いてしまう…

玄関で雑にローファアを脱ぎ捨て、直ぐさま二階の自分の部屋に、たったたつと小走りで行く

ガチャツつと部屋のドアを開け、制服を着替えることも忘れ、そのまま机に座り、目の前のノートパソコンの電源をつける

（襲われた人が魚なんかに見えた凶器は錯覚で…、氷のように冷たかった腕なんて、きつと深夜だったからそう感じたただけだね…）
私は内心…そんなことを思っていた

パソコンの画面がつき、視界にデスクトップの画面が広がる

なにも…、身に危険があるわけでもないのに、友達が襲われたわけでもないのに、この代償が悪いものでもない…はずなのに、ただ黙ってパソコンで調べずにはいられなかつのは
うまくは表現できないけれど…、ただ知っておくことで自分の中で小さな安心みたいなものが欲しかったのかもしれない…

カチツ…カチツ

まだ午前11時半過ぎの、至つてのどかな月曜日

私の部屋にはパソコンをクリックする小さな音が響く…

パソコンで調べ始めて30分程の時間が経った…

「…ふあゝ 疲れたゝ」

うーんっ、とイスに座ったままの状態で、まるで猫のように目一杯

伸びをする

今日のような穏やかな日中にこうやって伸びをするのは本当に気持ちいい

結局… 30分もずらーつと出てくる検索ページをしらみつぶしに集中して調べてみても、あのホームルーム中に携帯で調べたこと以外には目新しい情報は見つからなかった…

灯が今日の朝教えてくれたように、事件が起きたのは昨日の夜、…まだ朝のニュースでやっと出たような事件ならパソコンで調べてもまだほとんど情報がないのかもしれないけれど

2ちゃんねるの掲示板やニュース記事全般でも、特に代償のことや異質特別な情報にかするような書き込みは全くなかった

（やっぱり私の勘違いだったのかなー）

でも…、そう思うと、なんだか急にあんなに学校で焦って取り乱していた自分に少し笑えてきた

新学期早々、…朝からの緊張の糸がほどけたのか、私はそのまま制服のスカートのシワも気にすることなく、ホッと安心して、…いつの間にか気付けばベットでぐっすり眠ってしまっていた

………

………

………

…

… 何時間寝てしまっていたのだろう…

まだ半分寝ぼけた頭と目を擦りながら、もぞもぞ… ベットから起き上がる

顔を上げ、部屋の時計を確認すると、もう4時過ぎになっていた部屋の窓の外に広がるいつもの街が赤い夕焼け色に染まり始め

ビルに途切れた眩しいオレンジ色の光は、私の部屋に注ぎ込んでくる

「ふぁゝ…トイレ」

寝ぼけた身体とふらつく足で一階のトイレに行く

「はぁゝ 眠い…」

（あ…そういえば、おにいは帰ってこないんだっけ）

「はぁ…夜ご飯…、私が作らなきゃいけないんだ… お肉とかお魚とか冷蔵庫にあったかなあ」

…お魚とか…

…魚…？

（… あれ… ちょっと待って…）

…なんで、こんな簡単なことにもっと早く気がつかなかったんだろ
う…

私は大事なことを見落としていた

（もし通り魔が凶器に本当に魚を使っていたのだとしたら…）

私の部屋の押し入れにしまい込んでいるものも…、凶器として使えるものなのか…どうか

あれが逆に、もしかただのまぐろだったなら、凶器に使うことなんて不可能だし、私はこの事件となんてはつきり無関係になる

私はどうしてこんなに一番わかりやすい方法を見落としていたのだ
ろう…

だんっだんっだんっだんっ

思考する頭より、反射神経とも言える身体のほうが先に動いていた、私は二階の自分の部屋に向かって、全速力で階段を駆け登る
そして、ガチャツと勢いよく部屋のドアを開け、視界を押し入れの
ドアの先に向ける

「ふう…ゴクツ…」

さて、これから…どうしよう…、肝心の押し入れの目の前に立つてはみたけれど、怖くて、開けられない…っ

………

「はぁ…はぁ…」

押し入れの前でどれだけの時間が経ったのだろう…

さっきまであんなに綺麗な夕焼け空が見えていた窓からは、すっかり日も落ちて景色は夜空に変わろうとしていた

時間の流れに置いていかれるかのように、…私は一人押し入れの前に立ち尽くしてしまっていた…

中学生のころにここに閉じ込めたあれは、…二度と開けることのない開かずの扉なんだって思っていた…

中学生の私が衝動で閉じ込めたあれは、時間が経つにつれ本当に一度死んだ私の死体のような感覚になっていた

今の私からすれば、…あれは一度死んだ以外に私の一番辛い思い出の塊でしかない…まぐる…

でも、この開かずの扉を開けなくちゃ…っ、モヤモヤな通り魔事件との関係がはつきりするんだし…っ

（ビビってちゃだめ…っ、…どうせいつかは開けるときが来るんだから、後回し後回し…引きずりながらなんて考えちゃ…だめ）
目の前のドアを一枚開ければ、はつきりするはずなんだから

…ふう…

深く深呼吸をして呼吸を落ち着かせる、確かに動く右腕がドアにかかる

左手の握りこぶしにもぐつと力が入る…そして、…えいっ！！

バツッ …！！

意を決し、勢いよく開かずの扉のドアを開けるっ

(……ッ！！)

…いた

…一年間開けていなかった、そのほの暗い空間の真ん中に…湿った空気と匂いの中に、それは消えることなく中学生の私が巻いたバスタオルを今も被りながら、ホコリまみれに腐ることもない姿で…

「やっぱり… あなたは、魚、じゃないんだね…」

触れて確認しなくても、普通の魚なら一年間も押し入れにしまい込んでいたら、腐り…異様な臭いを発し、形など保てないものしかし、目の前のそれは、…確実な形を誇り、私が開けるのを待っていたかのように堂々と横たわっていた

命の恩人…、まぐろ、…

「ごめんね、ちょっとだけ、確認させてね…？」

…

第4話

扉一つ開いた…その先

………

「…私を助けてくれたあなたは、凶器ですか…？」

「それとも… 魚の形をした別の何かですか…？」

…小さく震える唇から、微かに発したかも分からないようなこぼれ落ちた問い掛けは…、どんよりとした空間の中に溶け込んでゆくほの暗いこの闇の中にひっそり横たわっていた…命の恩人
その前に立ちすくむ私…

まだ震え続ける両手で、ゆっくりとそっとバスタオルに包まれているまぐろに触れる…

（！？ 冷たい…っ）

反射的に手を引っ込めてしまう
もう一度ゆっくりまぐろに触れ、縛っていた紐を少しばかりてこずりながら解き、包んでいたバスタオルも剥がす

一年間のホコリを浴びたバスタオルは、確か…水玉模様だったはずなのに、今では洗濯しても元の色には戻らないほどにホコリがこびりついている

まぐる自体に関しては全くの変化が見られないものの

…季節を通し、湿気によってぼろ雑巾のような布きれになってしまったバスタオルだけが閉じ込めた月日と歳月の重みを感じさせる…

薄暗い押し入れの世界から異常なほど冷たいまぐろを…ザザッと半分引きずりながら抱え出す

…そして、一年ぶりに光のある世界へと放つ

その瞬間、私は初めてまぐろのその明確な色と形を知る
死体…などでは到底なかった…

腹部を中心に全体的にかかる綺麗な銀色は、動かすたびにあらゆる
角度で部屋の蛍光灯の光を反射し、宝石のようにキラキラと光って
いて

反対に、背や尾びれに染まる青みがかった黒色は、まるで深海の深
い暗い重い色のように、見とれてしまうほど綺麗な色をしていた
尾びれは力強い三日月形をしていて、付け根だけが異様に細い

(…きれい)

見た第一印象の感想はまずそれだった

「これが…あなたの姿なんだね」

そんなとき、ふと、まぐろの腹部を見る

(なんだろう…これ)

銀色のまぐろの肌を指でなぞると、何やら小さくマークが目印かバ
ーコードみたいなものが刻まれている
普通のまぐろには絶対ないものである

それをよく目をこらして見ると、パソコンで打ったような黒い字の
ローマ字で、小さく「Lilys」と刻まれてあることに気付く

「…? …Lilys…?」

(どういう意味だろう…)

いったんまぐろを床に置いて、慌てて机に置いてある英和辞典を開く

(…Lil…Lil、… あったっ!)

……

(えーと、なにになに…)

……

(つつ… !?!?)

…驚いた…と同時に、ああ…そうか…、そういう意味だったんだ…

と納得してしまう

- Lillys - (リリス)

意味は日本語に直すと、- ユリ -

そう…私の名前…

何の因果なのだろう

このまぐろの名前なのだろうか、わざわざ「YURI」という私の字ではなく、花の百合を表示しているあたり…、きっとこれは私の名前の意味を含めた、このまぐろの名前なのだろう…

「
…Lillys…」
リリス

そう呟いて…、今度はまぐろの尾びれの付け根あたりを右手でぐつと握り、…左手も同時にそつと添えてる

なぜだろう…、さつきとは違い、今は全くまぐろの冷たさに痛みを感じない、それどころか気持ちいいくらいにグツと握る掌がしっくりくる

チラッと視線を横にずらすと窓に映る今の自分の姿が見えた

まぐろ…いや、リリスを構えている私の姿は、…まるで大きな刀を構えているかのようだった…

鋭く尖った刃物の先っぽのように銀色に光るリリスのしなやかな身体、力強い印象を与える青い尾びれ…

その身の丈ほどもあるリリスを軽々構えている私の姿…

(……………)

確かめるまでもない…その光景をただで私は、何かを斬るや叩くなどの動作をしなくても…分かってしまった

なぜなら…窓に映っている私は、それは間違いなく…「凶器」を手

にしていたのだから

(……同じなんだ……)

結局、私は…、通り魔と同じ力の持ち主だったんだ…

全身から力が抜け、まぐるは手からすっぽ抜け、床にドンツと凄
音をして落ちる…

それと同時に崩れ落ちるかのように、命尽きるように…私はその場
にしゃがみ込んでしまう…

リリースが武器だったからどうということよりも、…今から通り魔と
して自分が警察に誤認されてしまう不安や恐怖感が…恐ろしくて…
今までこれほどまでに大きな秘密や隠し事なんてほとんどしないで
生きてきた私が、ニースに出るほどの事件の未だに捕まっていな
い犯人の重大な秘密を知り、それどころかその重大な力をも持って
いる…

これがどうゆう意味を示すことになるのか
もし通り魔がこれからも捕まらなければ、私は…拳銃を隠し持って
いることとほぼ同じ意味を示すことになる…

今まで平和に暮らしてきた私には、この事実があまりにも大きくて
辛くて…痛くてしょうがなかった

もう一度…今度はバスタオルも巻かずにリリースを押し入れに乱暴に
入れ、ドアを勢いよく閉める

(…はあ……はあ)

…私はその場で…もう一度、俯きしゃがみ込んでしまった

………

………

「う…つつ…う…つつ」

一息つき、周りの音がなくなると今度は孤独感がぐつと押し寄せてきて

そして…急にとめどなく…惨めなほどに涙が溢れてきた…

（新学期なのに、何でこんなことしてるんだろう…私）
（どこから…後悔すればいいんだろう…）

…死んでしまったこと…？

…もう一度生きてしまったこと…？

…通り魔事件が起きてしまったこと…？

（何で…私なんだろう…）

………

「っ…グスツ…うつ… もう…もう…寝よう…」

…もういいや、今日はいろいろとありすぎて疲れた

（早く…寝てしまおう）

部屋の電気を消してベッドの上に倒れ込む…

「…っ…う…ヒクッ…」

ぼろぼろと溢れ出る涙が枕を濡らし、自分の頬っぺたに触れて冷たい感触が当たる…、目が涙でジンジンする…

だけど…涙は止まりそうにない…

………

………

…30分は経ったのに全く眠れない…、もう何度目とも分からない
寝返りを打つ…

その時だった
ブーッ… ブーッ… ブーッ…

…!?!?!

いきなり、ベットの隅に置いてあった携帯がマナーモードで鳴る
暗闇の中で手に取った携帯を開くが、画面の光が泣いていた目にし
みる…

新着メール一件

そう表示されている画面…

(あ … 灯…)
灯からだった…

- 本文 -

「今日さ、後半あんまり元気なかったっばいけど大丈夫? ^ ^
ちよつといじりすぎちゃったかな? w

悩み事とかなら、この灯さんにいつでも相談してね ^ ^ ^

「…っ… あ… 灯… っ」

灯 やっぱり… 気付いてたんだね…

…ごめんね

…ありがとう…

…うれしくて… 言葉にできない… っ

きつと灯はこのことは知らない…

でも、それでも… っ

どうしてだろう… 灯のメールの言葉一言一言が胸にじーんとし
みる…

…いつの間にか隙間が開いていたはずの心が満たされて、…恐ろしくて泣いていた心がゆっくりと安心へと変わってゆく…

…ただ、うれしくて…うれしくて…っ

お世辞でも綺麗とは言えない涙でぐちゃぐちゃな顔で灯にメールを送る、…精一杯のただ一言

「ありがとう 灯」

結局、今日はそこで私は目を閉じた

第5話

- 9月2日 - (火) -

「…ふぁゝ もう朝…」

昨日一日の出来事が嘘かのように、また何事もなかったかのように始まる朝

…少し目が痛い…

(……そうだった 昨日は…確か泣いちゃって、それで…そのまま)

ベットからのろのろと起き上がり、昨日のことを思い出しながら鏡の前に立って自分の顔を見してみる、鏡に映る私の顔は微かに充血した目をしていた…

それだけで昨日どれだけのことがあったのかを物語っていた…

(はぁ…)

(もう…すっかりしよう、こんなこと悩んでうじうじしていてもしょうがないし…)

充血した目にそっと指で上からなぞる…

(昨日あれだけおもいきり泣いたんだから、…もうちゃんとしよう)

そう自分に言い聞かせて、半分無理矢理気分をリセットしていつもどおり学校へ行く支度を始める

結局昨日は、お風呂も入らず制服のまま寝てしまったせいで…身体も髪も少し汗っばい

軽くシャワーを済ませてドライヤーで髪を乾かす
さっぱりした身体の上に新しいブラウスを腕に通し、また制服を着

なおす

朝ごはんは適当にパンで済ませて、携帯の時計を確認する…7時45分

（気分一新してまた今日もがんばろう）

昨日のことを打ち消すようにそう心の中で自分に言い聞かせて家のドアを開ける

いつものように歩きながら空を見上げていると、髪がなびき、それと同時に首筋に気持ちのいい風が通り過ぎていく

「〜」 気持ちいい風〜

もう9月だというのに今日は朝から真夏日のような天気だった
太陽が味方をしてくれているかのような眩しいほどの日差し、雲一つない青空には悠々と渡る白い飛行機がひとつ、その後に直線上に真っ白な飛行機雲が描かれてゆく

何も変わらない穏やかな街並み、いつものように通学路をのんびり歩くと視界の両脇には青々とした緑が広がり、残暑の今日の朝はそんな風景に包み込まれていた

学校の近くに生えているひまわりも、その大きな黄色い花をゆらゆらと風とともに揺らしている

そんな風景を見ているだけで、…さっきまで一緒にいた憂鬱な私の心は風とともに青い青い空の中へと消えてゆく気がした

そんなことを考えながらいつものように学校に着く

二階へ上がり、相変わらずまた教室のドアの前に立つ…が、しかし、昨日のように…そーっと開けることができない

灯からの昨日のメールの文章がとつさに頭の中に蘇る…

このドアを開けた後の灯の反応を少し不安に思う…

（抱きしめて…くれるのかな…）
一瞬そう思いつつも教室のドアを開ける

………

… たった た、ガバツ！

「ゆり〜 おはよーっ」

「…！？ 灯…おはよう」

（よかった…っ、私が思うほど、あんまり…気にする必要なかったのかな）

灯はいつもと変わらない灯のままで接してくれた、内心…灯だって気付いているはずなのに…、そう思ってしまうが、それでも灯がこうやって普段のようにいじってくれることが、…私なんかよりずっと大人なんだって実感してしまう…

「ゆりは今日もひんやりしてて気持ちいいね〜」 すりすり…」

「しかたないでしょ 体温……低いんだから…っ」

本当に…ありがとう、灯…

「こうゆう暑い日は、ゆりはあたしだけの特製ひんやり抱き枕だね〜」

…抱きしめられたまま話しは進められる

「あ そういえばね、ゆりと一緒に行こうねって言ってたBUMPのライブチケットだけど…実は…」

ビクッ…っとする

「え…っもしかして取れなかったの…??」

「いやあ…実はね、その…BUMPの10月2日のライブチケット、イープラスでパソコンと携帯の両方で掛け持ちで予約したら、…まさか両方二組、計四人分も取れちゃって…」

「…えーっ!？ もう…ばかじゃないの… …やっぱり」

「やっぱりってどうゆう意味っ!？」
もう…やっぱり、灯は…大人なんかじゃなかった

「で、でね…ゆり？ 実はあたしが前に委員会で一緒に知り合った子が同じBUMPファンでね、それで…もしゆりが嫌じゃなかったら、…一緒に誘っちゃだめかなあ…なんて」

「うーん……」

(…ちよつと不安だった 私は昔から人見知りで… 現に今も灯以外の友達もいない、…でも…まあ、その灯の友達なら…)

「うん… 多分平気」

「本当っ!？」

「多分…だけど…」

「よかったあゝ ありがとうゆりっ じゃあ、適当にあとでお昼ご飯のときとか誘ってくるねー」

「あ…うん わかった」

(灯もあんまり友達が多いってほうじゃないし、あの灯の友達なら…多分)

………

- 4時間目 - 授業 - 生物 -

生物の授業は1階の小汚い生物室で授業をするが…、小汚いのはまだ我慢できるものの、その独特の臭いは相変わらず苦手ではない

何やらつまらない生物関連のビデオが流れているけれど、私には正直、灯のその友達のことが朝から気になっていてそれどころではなかった…

(ん…?)

ふと自分の座っている机を見ると、シャーペンで小さく書かれた落

書きを発見する

やっぱりほかにここに座っていた違う誰かも退屈だと思っていたの
だろうか…、そう思うと何だか少し妙に親近感に近いものを感じて
しまう

その落書きをよく目を凝らして見ると…

(…文章…?)

本当に小さな字で書かれていた文章…

「誰か…助けてください」

…!?!?

(…どういう意味だろう)

どういう理由から分からないけれど、ただ私の机にはぼつんと言、
そう書かれていた…

(いつの落書きなんだろう…)

先輩の人が適当に書いたのだろうか…
なにがどうあれ、もしかしたら次の生物の授業のときには返信が来
てるかもしれない、…そんなちょっとした期待感と暇つぶしの気持
ちで私もその落書きの下に落書きをする

「大丈夫ですか？」

そう書いておいた…

4時間の生物の授業が終わってクラスに帰ってくると、すでにそこ
には本当に灯が朝言っていた子を連れて来ていた…っ

「ゆりーっ 呼んできたよ」

私は一目見て…驚いた

…とても私や灯やほかの子と同じ年とは思えないほど大人っぽくて

綺麗な人だった…

背は灯と同じくらいで、可愛い…というよりは綺麗、と言っべきだろうか

灯のふわつとした柔らかくて明るい栗色とは対照的で…

私と同じ…いや多分それ以上の長さがある黒髪は、私のような…チヨコレート色ではなく、本当に美しい清潔感のある真っ黒な綺麗な黒髪で

目が悪いのか黒ぶちの眼鏡をかけていて

しかし何より印象的だったのは、…こんな真夏日のお昼にも関わらず、この人が紺色のカーディガンを羽織っていたこと

…体温が30 の私ですら今日は暑いと感じるのに…

そのちよつとだけぶかぶかなカーディガンの袖から見え隠れしているちょこんとした指先がかわいらしく思う

…本来なら冬に着るべきカーディガンをこんな真夏日に着ていたことそれが印象より先にこの人に疑問に感じたことだった

図書室にいそうな静かな文化系な、でもそれでいて優しそうな目をした清楚な印象…

そんな不思議な印象が、私が初めてこの人に会ったときの第一印象だった

第6話

「はじめまして小林さん、C組の綾瀬 ひよりと申します」

「あう…っ あ…あの…はじめまして、…小林 ゆり…です」

（やつぱり…初対面の人の前だとだめだなあ…私）

顔はきつと笑えているけど、緊張してしまっている…私…

「ゆりー？、大丈夫だよっ ひよりはそんなお堅いキャラでも毒舌キャラでもないんだから」

灯はそう微笑みながら私の頭を軽く撫でてくれる

「あの、そんなに緊張なさらないでください」

「あ…ごめんなさい つい初対面の人とはこうなってしまうて…」

「私もどちらかと言えばあまり人付き合いが得意なほうではありま
せんから、安心してください」

そう言いながら、にこつと微笑んでくれる

その黒ぶちの眼鏡ごしに柔らかい瞳で見つめられると、ついドキッ
としてしまう

そして私の顔を見ながらカーディガンで隠れていた手でそつと優しく
撫でてくれた…

（はわあ… あったかい…）

なんでかなあ…、こういうときは自分の身長がちっちゃくてよかつ
たと思ってしまう

柔らかい手の平が私の頭をサーつと優しく撫でる

「手入れのされたきれいな髪ですね」

「ありがとうございます…っ、で、でも…綾瀬さんのほうがきれ
いです」

「ふふっ、ありがとうございます」

そつくすくすと笑うと灯が笑ってくれたときのよちに私までなぜか
安心できてしまう

「あと 苗字じゃなく名前で呼んでくださって大丈夫ですよ」

「…えっ、えつと…じゃあ ひより…さん？」

「同年なんですから呼び捨てで構いませんよ」

（…うう／＼／＼）

灯はなぜかちよつと距離を置いて傍観している、あの…いつもの私をいじるときにニヤリツという笑みを浮かべて

（…灯…っ）

「どうかなさいましたか？」

「い、いえ…っ では、えつと、その…よろしくお願いします…」

ひより／＼

「はい こちらこそよろしくお願いします ゆりちゃん」

「ゆり、よかったねっ 新しいお友達ができて、ほら…よしよ

くし」

（うう… この、ばか…っ）

そんな半分、灯の企みに近いような形で、…私には新しい友達ができた

綾瀬 ひより 私の二人目の友達

話してみると第一印象より優しい人で本当に素敵な人だった

「ひよりはお昼ご飯はお弁当なんだね」

お昼ご飯中、いつもなら窓側の席の前後で灯とだけ合わせる私の席…でも今日はひよりの座る席ともくつついている私の席…、それがどうしようもなく私にはうれしかった

「はい いつも私はお弁当にしていますよ」

「…もしかして、自分で…作ったりしてるの？」

「はい もちろんそうです、それがどうかなさいましたか？」

「いやー… だって私も灯もお弁当とか…作れない側だし…、ね？」

灯

「なっ！、失礼なっ、ゆりはともかく私は…普通にめっちゃ得意だからっ」

「…でもいつも、買い弁じゃん、しかもパンじゃん…、お弁当とか見たことないじゃん…」

「違うのっ、ただそれは…これが好きなだけだからっ」

そう言って手に持っていたパンをぐいっとなぞる

…抹茶いちごメロンパン…

私たちの学校の前にあるコンビニでしか売ってないと噂される幻のパン…、そして…全校生徒中、灯しか買わない幻のパン…

「あ そのパン…」

ふと自分のお弁当を食べていたひよりが呟く

「ひより…このパン知ってるの？」

「はい 誰も買っているところを見たことがなかったんですけど、いたんですね」

また、その柔らかい笑顔で微笑む

「…なっ！、ひよりまで…っ、全く二人とも…失礼だぞ、抹茶いちごメロンパンにっ、…普通においしんだからっ」

「これだけの人がいて、一人しか買わないパンを世間ではおいしいとは言わないんだよ？、…たぶん」

「……ゆりだつて、ちっちゃいじゃんっ」

「いやっ、全然今の話と関係ないから…っ、無理矢理いじろうとするのやめようね灯」

「…ふふっ お二人は本当に仲良しなんですね、見ている私までまで楽しいです」

灯とそんなことで言い合っていると今度はひよりにまったくすすくと笑われてしまった

…なんだか、私の日常は、少しだけ賑やかになった

お昼休みも終わり、ひよりは自分のクラスに戻った

………

5時間目も6時間目とも今日も無事に一日が終わった放課後
今週は私たちが教室の掃除当番だというのに…

誰かさんは掃除が始まってすぐに「トイレに行ってくる」…
と笑顔でそう言い残して、二度と教室には帰ってこなかった…
そう、…灯…

（はぁ… また灯に騙された…）

時計を見ると… もう4時、やっと教室の掃除が終わって、うーんっ、
と伸びをしながら窓ごしに外を見る

もう日が落ちかけていて教室がオレンジ色に照らされ始めている
こんな時間になってもまだまだ暑い今日は、半袖の今も少し汗ばむ
くらい…

ほかに用事もなかった私は教室を出て生徒玄関に行く
上履きからローファーに履きかえていたときだった…

「ゆりちゃん！」

ふと、後ろから名前が呼ばれる、直ぐさま振り返ると

…紺色のカーディガン…黒髪…

…ひよりだった

私が振り向いたからか、ひよりは、あっ！ という顔をしてこっち
に手を振ってくれている

その手を振っているときにカーディガンの袖に見え隠れしている指
先がちよっと可愛い…

こっちのほうから見ると本当にひよりが少し地味っぽい文化系女子
に見える…

「ひよりさん…、じゃなかった…ひより、今帰り…？」

「はい 図書室に本を返却しに行っていたらこんなに遅くなってし

まいました」

「そうだったんだ」

……

…まだ灯がないと少しだけぎこちない二人になってしまう…

「ゆりちゃん？」

「はい…っ」

「今から一緒に帰りませんか？」

私もちようど言いたかったことを先に言われてしまう

「あ…はいっ 私も今それ…言おうと思ってました」

秋の夕暮れどき、川沿いの道をゆっくり歩く二人…

ひよりの家へ続く道、私の家はこっちではないけれど、ひよりとただ一緒に帰って見たかった、…ただそれだけの理由で途中まで一緒に帰ることにした

この川沿いの道を灯以外の人と歩くのは何年ぶりだろう

たまに首筋を通り抜けていくそよ風が気持ちいい

小さな古いベンチを見つけてそこに一緒に座る私とひより

「今日は…何て言うか、ありがとうございます」

自分でも、どこのありがとうかも分からないありがとうをひよりに言ってしまう…

「いえ、こちらこそ ありがとうございます」

…それでも、ひよりからのありがとうは幸せな気持ちになった

「風が気持ちいいね…っ」

「はい そうですね」

…まったりした時間が流れる

「ゆりちゃん？ ひとつだけ…質問してもいいかな？」

「あ、はいっ どうぞっ」

「その体温…どうしたんですか…？」

っ
…！？？

……

……

（っ…ど、どうして…っ！？）

……分からない…

…どうして…どこで…？

灯には今まで何にも言われなかったのに…、どうしてひよりには一発ではれたの…？

（…！っ そうだった…、灯には…っ）

すっかり忘れていた、灯がそういう子だということを…

（当たり前だ、普通の人が私に触れたらどういうことになるか…）
馬鹿だった…うかつだった…

昨日確かめた通り魔とのことも、ひよりという新しい友達ができたといいことで私はすっかり有頂天になってしまっていた…

…どうしよう…

「…あ あのね… ひより…これは…」

……

……

私は…どうすれば…っ

第7話

.....

「あ、あのね... ひより？ 私... ね？」

空気が重い...、怖くてひよりの顔をまともに見ることができない
ひよりの顔を見てしまったら...、どんな顔をして泣いてしまうかも
わからない...、喉元まで押し寄せている胸を締め付ける痛みに震え
た声を...ぐつと必死に必死に押し殺す

もしひよりに私の秘密がばれてしまえば、警察に見つかってしまう
可能性だって大きい...

そしてなにより、もし通り魔と同じような力が私にもあることをひ
よりが知ったとき、ひよりは改めて友達でいてくれるのだろうか...
今日できたばかりの友達が、こんな私を簡単に受け入れて...につこ
り笑って抱きしめてくれるのだろうか...

あらゆる不安と暗い考えが私の喉の奥に詰まり、渴ききった口の中
はざらざらになる

「その...ごめんなさい...」

何で謝っているんだろう...私

「.....」

ひよりはそれに何も言うわけでもなく、何も語るわけでもなかった
ひよりは今、どんな顔で私のことを見つめているのだろうか...

しかし、私は次の瞬間、ひよりの行動に驚いてしまった

なぜなら…ひよりは、その細い腕でスツと私の頭を撫でてくれたからである

「…冷たいね」

「……っつ」

自分の頭の上を何度も優しく往復しているひよりの手の温もりがじんわりと伝わってくる…

予想外のことに私は今度は恐怖感とは真逆の理由で声が出なかった

「ゆりちゃん…ごめんなさい」

そつと私の頭を撫でていたひよりはそう呟いた

「…どうして、ひよりが謝るの…？」

「だって…あのとき、お昼に一回だけ私がゆりちゃんの頭を撫でたとき、ゆりちゃんが…人の身体とは思えないほど冷たくて、だからつい気になってしまつて、聞いてしまつて」

「…でも、ゆりちゃんが今、そこまで怯えるほど震えているっていうことは、やっぱりこれには触れてほしくないような秘密が…あるんだよね」

「………うん…」

私は俯いたまま…そう小さく頷いた

…違つたんだ

ひよりのさつき言つた「その体温…どうしたんですか…？」という本当の真意は、疑問や偏見などではなく、心配や気遣いに対しての問いかけだつたんだ

…今日できた友達を信用できていなかったのはひよりなんかじゃない、私のほうだつた…

（馬鹿だなあ… 私…）

「灯ちゃんみたいに察っして気付かない振りみたいな気の利いた配慮もできなくて、本当にごめんなさい」

…そっか、そうだ、…灯はそうだったんだ

（にぶいなあ… 私…）

ひよりは何にも謝る理由なんてない…、なのにひよりは何度もその正直な「ごめんなさい」を私に向けて連呼してくれた

表に見せない隠れた優しさが灯の優しさなら、ひよりはその素直な優しさこそが良さなのかもしれない

上手く言葉に表せないけれど

確かなことは、今胸に感じる…この心の温かさがそのまま答えでよさそうだ…

……………

夕暮れの空はだんだんと遠く遠くの空に沈み込んでいく

秋の風に吹かれまた今日という一日も流れて去っていくこの道

私とひよりが静かに腰掛けるその古いベンチの前道には、自転車に二人乗りをした高校生のカップルや、買い物の帰りなのだろうか大きなビニール袋を手に微笑みながら歩いてゆく若い夫婦や、家への帰り道の途中なのだろうか賑やかな子供たちが走りながら通り過ぎていく

その道の下川の川辺の芝生や土手に続く雑草が生えかけている階段の辺りにはせわしく飛んでいるトンボたちの姿が見える

なぜかその当たり前の光景が今の私の心にはじーんと染みる…

「ひより…私もひとつだけ質問してもいい？」

そんな風景を見ていて、とっさに私もひとつだけひよりに気になっていたことを質問したくなってしまった

「はい」

「…どうして こんな暑い日にひよりはカーディガンを着ているの？」

私が、なにより気になっていたことだった

……

「そうだね、……ゆりちゃんになら…話しても大丈夫かな」

(……??)

……

……

「これはね 私が去年…中学三年生のときの夏休みのときのお話
そう言ってひよりは話し始めた」

「もう夏休みが間近まで迫っていた時期、私は学校の帰り道で運悪く通り雨に当たっちゃってね、制服もビショビショになって歩いているときだった」

本当に偶然だったのかもしれないけど、後ろからカーディガンをそつと私にかけてくれた人がいてね

向こうは自分がビショビショになって地肌が透けちゃうほどずぶ濡れになることもお構いなしに、私に笑顔でカーディガンをかけてくれたの

びつくりもしたけど、それよりもその人が私と同じ学校の男子だったことのほうに驚いてしまった

それがこの人と出会った瞬間だった…

私たちはそのことがきっかけで仲良くなった

夏休みに入って私たちは毎日のように遊ぶようになって、夏休みも終わりに近づいた日だった

私は、…ちょうどこの川沿いの道で告白された

私も好きになりかけてたし、私たちはすんなり付き合うことになった

楽しかった、毎日一緒にいて今までの毎日とは比べものにならないほど楽しかった

けれどある日、本当に幼かった私たちは浅はかな知恵と勢いでホテルに入ってしまったね…

…ゆりちゃん…ごめんなさい、そこであつたことだけは省かせね…、どうしても、今でも口にして言えないの…

でも私は、それ以来…その男子とは関係を絶ってしまった
どうしても…

そこからは…苦しくて息もできないほど、毎晩は孤独との戦いだつた…、幸せだった日々は、一変して悲しみが絶えない日々へと変わってしまった

…もう抱きしめてもらうことも、もう横で笑うことも、もう顔を見ることも、もう名前を呼ぶことさえもできない…、心を繋ぎとめておくものは何一つもなくなっていた…
それがどんなに辛いものか…

そして私は、それ以来過度の接触過敏になつてしまった
私の場合の接触過敏っていうのはね、他人に少しでも触れることだけでパニックを起こしてしまう症状で

病院にも通つてみた、けれど一向によくはならなかった

それも含めた理由で私は女子校に入学した

それでも今ではさつきみたいにゆりちゃんの頭だつて自分から撫でられるほどに改善はしたのだけれど、だけどやっぱり今でもいきなり相手から触られるとパニックになつてしまうときがあるの

…そして結果、唯一私に残つたもの、それがこの始まりのカーディガン

あの人にはもう会えない…

自分から拒絶したはずなのだから

でも唯一残つたこのサイズの合っていないぶかぶかのカーディガン

を捨てることは…どうしてもできなくて、…今では接触の危険からこれに守られているような気がして、おかしい話だよね…

それでもあの人に会ってしまったことを後悔はしていない
むしろ大切なものをたくさん、楽しかった日々をたくさんいただけ
たことに感謝している

私がただ一つ今でも後悔していることは…あのあと怖くて逃げ出してしまった中三の私に対してだけ

もしあの日、勇気を持って走り出せた自分がいたなら、今の私もまた少し違った世界を見ていたのかもしれない

ちなみに…そのときに私の気持ちを前向きにさせてくれたのが、その当時偶然ラジオで聞いたBUMP OF CHICKENの曲だったの

そして女子校で友達を作ることが怖くて一人ぼっちだった私にできた唯一の友達が灯ちゃんだった

そして今日、こんな私にも二人目の友達ができた、ゆりちゃんに出会えた

挫折した世界に生きているはずの今の私は、どうしてだろうね
…そんなに気分は悪くないんだよね

………
長い時間話していたひよりはそう言い終えると、空を見上げた

………
この人は…同じだ

去年の同じ時期に私とは違う痛みを抱えて生きている

…私もいつか、この人のように今のこの痛みを思い出話のように空を見ながら他人に語れる日が来るのだろうか…

話を終えて、空を見上げていたひよりの顔はなぜか私には輝いて見えた

「…ありがとう」

最後にひよりはそう呟いた

その恋人だった人に向けてなのか、昔の自分に向けてなのか、灯や私に向けてなのか、…誰かに向けた言葉を呟いた

その後、…私もひよりに今抱えている痛みのことを勇気を振り絞って全てを語った…

通り魔とのこと、二つの代償のこと

途中、涙がこぼれそうになった私はひよりとは違って途切れ途切れでしか言うことができなかった…

その間、ひよりはただ私の頭をずっと撫でてくれた

お互いそのあとは、励ましや感想を述べることなく、でもそれでも言葉の外側で伝えたことはきつとお互いに感じたはず

今日はそのままお互い手を大きく振りながら別れた

「また明日ねっ」

…今の私たちにはきつと魔法のこの言葉を使いながら

………

………

………

そして今日は、私は綺麗なほど早く眠りにつくことができた…

第8話

- 9月3日 - (水) -

「ふあゝ 朝かあ」

うーんと伸びをして、ベットから起き上がる

ベットの隅に置いてある、まだ充電器にさされたままの携帯を開ける、画面を確認すると時間はまだ、6時32分…

そのまま部屋のカーテンをおもいきりシャーツと開ける

その瞬間、バツと部屋の中に朝の日差しが降り注ぐ

今日の朝はそんな久しぶりに早起きですっきりとした目覚めのいい朝だった

外は相変わらずの景色、しかし今の私にはいつもよりどこか街が光って見えた

手っ取り早く制服に着替えて一階に続く階段を降りる

時間に余裕があったため珍しくテレビをつけて、ちよつとのんびりする

(そういえば… テレビを見るの久しぶりかも)

「ふあゝ」

(なんだかこうして一息ついてゆっくりするのも久しぶりかも、…
このごろはいろいろとあったし)

そんなことを思いながらテレビのニュースを眺めているときだった
(…???)

「昨夜、東京都多摩市聖蹟桜ヶ丘駅の駅前通り付近にて仕事帰りの男性が何者かにいきなり後ろから襲われる通り魔事件が起こりました
被害者は右腕を鋭い刃物のような物で切られたものの軽傷

なおこの聖蹟桜ヶ丘の駅前通りでは二日前にも同じ手口での通り魔事件が起こっており、警察はこの事件との関連を調べるとともに犯人を捜査中とのことです」

「あ…つつ！！？」

声にならない声をあげる

「こ、これって…っ」

(…………っ)

体中の血が冷たくなる感覚…

意味の分からない名前の分からないような汗が頬をつたる…

(まずい…)

目には見えないけれど、でも確かに…着実に…近づいてくる危機感到に身体が震える

「一度で…終わりじゃなかったんだ」

そうだ、当たり前だ…

‘通り魔’なのだから…決して一度だけとは限らない

そういう考えをできていなかった私の完全なミスだ

またテレビの画面に目をやる

「現場には手掛かりや証拠のようなものは残っておらず、被害者の証言では右腕を切られた後、凶器は確かに両手に持っていた、とも証言しており、警察は二日前の事件の被害者の証言とともにこの犯人が今までの通り魔とはあまり例にない犯行手口から、ただの通り魔ではない可能性も視野にいれ捜査中、とのことでした」

…通り魔はまだ捕まってい

でも、どうしよう…っ

(…………っ)

いや、落ち着こう私…落ち着こう…っ

（今は深く考えないで…、思い出してよ私…、昨日ひよりと見つけた、‘確かなモノ’を…）

「ふう…」

私は小さく深呼吸をし、気持ちを落ち着かせる

携帯を開き時計を確認すると、もう7時45分…

「…よし、行こう」

できるだけ何事もなかったかようにガチャと勢いよくドアを開けたときだった

「ウーッ　ウーッ」

目の前を物凄いサイレンの音を響かせながらパトカーが通過していく…っ!!!?

（やっぱり…っ）

…結局、私の家から学校へに着くまでにパトカーのサイレンの音はほとんど絶えなかった

さつき、深く考えないとは思ったものの…ここまでくると不安が大きいの確かである…

警察の人に、もし触られてもしたら昨日のひよりのようなことではすまないのだから…

もしまたこの次があったとして死者でも出たら、私が犯人より先に警察に見つかつた場合どう言い逃れすればいい…？

家から学校までの短い距離が今の私には途方もなく遠く感じた

（…怖い）

そんな恐怖の中、私はなんとか学校にたどり着いた

そして、またいつものように二階の1年E組の教室のドアの前に差し掛かる

ガラッ…

たつたつた…ボフツツ！

「ふにや…！？」

…っ！？、なっ、分からないっ、なんだろう…、何かが私の顔面におもいつきり飛んできた…

「ゆりー おはよー」

はあ…考えるまでもなかった…、うう…やっぱりか…っ

「おはよう… 灯」

ぎゅうぎゅうっ

「今日もゆりはひんやりさんだぁー」

「しかたないでしょ… 低体温なんだから」

（本当は灯が一番私の体温のこと気付いてるんだよね…）

「冷たくて気持ちいいよー ゆりー… すりすり」

…うう…

「おはようございます」

灯とじやれているときだった、後ろからそう聞こえた

「… あ ひより、おはよう」

ひよりだった

相変わらず今日も紺色のカーディガンを着ていた

「なんでしょうか、朝からパトカーがうるさいですね」

「あれー？ ひより知らないの？ 今日、めっちゃニュースで流れてたのに」

そう灯が言っ、私は少しビクツとしてしまう…

それをひよりには気がつかれてしまったのだろう、いきなり頭をそつと撫でられてしまった

灯が熱心にひよりにあの第二の通り魔事件のことを説明している、いや…灯だけではなかった、よく見ればクラス中の子の誰もが今朝のニュースのことを話していた

私もただの無関係な学生なら、自分の街で起きたニュースにワクワクもするのだけど

学校の中も…安全とは言えないかもしれない

………

………

- 5 時間目 - 授業 - 生物 -

「…はあ」

切羽詰まった午前中とは違い、さすがに午後はだんだんと冷静さを取り戻しつつあった

(…そういえばっ)

ふと、私は今自分の座っている生物室の机の落書きのことを思い出した

机に広げてあった無意味な教科書を静かにどかして机の書き込みを捜す

これもまた、一つの学生の暇つぶしの方法なのかもしれない

(……… あったっ！)

本当に目を懲らして見ないと分からないほど小さな字で書かれた文章、そしてその下にさらに小さく書かれた私の文章

ワクワクした気持ちでその下を見る

………

が…結局その下に更なる返信メッセージは書かれていなかった

(はあ、そうだよな…そんなにうまくはいかないよね)

昨日の今日ではまだこの書き込みをした人が授業を受けていない可能性もあるかもしれないが

ただ…ちよつと小説のような展開に期待してしまった自分に少しだけ悲しくなる

「ウーッ　ウーッ」

外の景色を眺めればまだパトカーのサイレンの音が街中に響いている
(もし今…駅前にでも行ったら…)

警察だって馬鹿ではないはず、きっと今の私が警察と鉢合わせにな
ったらいつも通りの自分でいれる自信は全くない…

ただでさえ、もう警察には二つの代償のことがほぼ見つかったに
ような状態だというのに

その代償の証拠は私自身だ…

……

……………

そんなことを考えているうちにそのまま5時間目も終わり、6時間
目の体育の授業も終わって教室に帰ってきたときのことだった

ずっと今日一日中通り魔のことを考えてぼうつとしていたからだ
ろうか、体育着から着替え終わって、ふう…と一息ついて席に座つ
たときだった

いつもなら机の中に必ず入れてあるペンケースがどこにも見当たら
ないことに気がついた

毎日見る、毎日触る、ぺったんこのフラット型の…ウサギのような
ふさふさした生地が特徴的なペンケース

なにより絵柄が水玉模様なので一目でわかる

ベースは黒に近い紺色、水玉のところだけ白色になっていて、雑貨
屋さんで見つけたときに一目惚れで購入してしまったちょっとお気
に入りのペンケース

机の中にもカバンの中にもやっぱり見当たらない

「ねえ灯？ 私のペンケース知らない？」

前で着替えていた灯にも聞いてみる

「え？ 知らないー なんで？、…無くしちゃったの？」

「うーん…わかんない …あ、でも5時間目のときに向こうに置いてきちゃったのかも」

机の周りをごそごそ探していた私は灯と話していて、ふとそう思った…

「灯、ちょっと探してくるね」

「ホールルームには帰っておいでね」

灯にそう言い残して私は一人一階の生物室に向かった

（まだこっちは授業中なのかなー）

生物室の前には着いたものの電気はまだ点いたままで

近付いてみると中から先生の声がしたため、やっぱりまだ授業中らしい

（うーん、…ちょっとだけ待ってみようかな）

………

………

第9話

一階の薄暗い生物室の扉の前に私はただじっと開くのを待っていた
こういうとき、悪いことをしたわけでもないのにどうしても気持ち
が落ち着かないのはどうしてだろう

そんなことを思っているときだった、生物室の中から一斉にイスの
引く音が聞こえる

それと同時に扉が開き生徒がずらっと出てくる

少し待つて中にほとんどの生徒がいなくなったことを確認して、私
はそつといつも座っている席に向かう

（窓側の一番後ろ…）

近付くまでは気がつかなかったが、私の席の場所にはまだ座ってい
る生徒がいた

（…小学生？）

…ぱつと見るとまるで小学生のような小柄で華奢な子が座っていた
自分もクラスではかなり小さなほうだけど、目の前のこの子はそん
な私よりもずつとずつと小さかった
そしてもっと目を引くことは

ハーフなのだろうか…、髪の色が、白…いや銀色をしていたことだ
った、銀色の髪のショートボブ
ありえないほど白く透き通った肌

（こんなに可愛い子この学校にいたなんて）

「あのう…」

（…瞳の色が青い）

不安げな表情を浮かべていたその少女は小さな声でそう呟いた
私の目を見たその綺麗なビー玉のような大きな青い瞳、柔らかそうな真っ白くて綺麗な頬つぺた、見れば見るほど見とれてしまう
同じ学校にこんな可愛い子がいるなんて私は全く知らなかった…

「…あ いきなりごめんね 実は…ここの机の中にペンケース入ってなかったかな？」

あまりにこの子が幼く見えて、思わず子供と話すときのような口調になっている自分に自分で驚く

「ペン…ケース？」

そう言うとその子は首をかしげ机の中をぐそぐそとし始めた

その仕草を見ていると本当に小学生が何かを探しているようで可愛くてまた見とれてしまう

「…これ？」

また首をかしげながら黙って机の中から取り出したは、…水玉模様のペンケース

そう、紛れも無い私のペンケースだった

「あつ！ これー 探してたんだっ 本当にありがとうね」

「……こくっ」

そう一回頷いて、その子は俯いてしまった

………

お互い会話が進まない…

もともと私も人見知りだし、こうやって自分から誰かに声をかけたのもいつ以来だろう

（そろそろ…私もクラスに戻らないと）

そう思ったときだった

偶然に目に入った机の隅っこ、ちょうどさっきまで見ていた落書き

があつた場所…

(…!?)

…驚いた

一時間前までは確かに私の書き込みの下には何も書かれていなかったはずの落書きに、新たに文章が増えていたからである

「…助けてください…」

そう小さくつぶられた文章…、始めの落書きに続く救難信号

「…この落書き」

私がそう言つて落書きを指差したそのときだった

「…っ!」

さっきまで俯いていたその子はいきなりビクッと反応する

「…あう」

そして、さらに下を向いてシュンと縮こまつてしまう

「あつ えつと…ごめんね」

私はとつさに謝つてしまった

そのときだった、いきなり目の前の少女は立ち上がり、そのまま走り去ってしまった…

「あ…っ」

(やっぱり… 言わなきゃよかったのかなあ…)

……

「あれ？」

(そういえばあの子、教科書もノートもペンケースも置いてっちゃった…)

教科書の裏を見してみる

(…1年B組 桜月 有珠)

同じ一年生だったんだ

やっぱりさっきのことも謝らなくちゃ…だめだよ
ね ペンケースの恩もあるし、帰りに届けてあげよう

……………

生物室を出て教室へ戻る

その途中だった

「ゆり」

後ろを振り返ったときだった

「灯? どうしたの?」

「いやー もうホームルーム始まるのにどこまで行っちゃったのか
なーっと」

「ああ…別に」

あの子とのことは言わないでおこう… 落書きのこととか…

「…?? ゆり?」

「あ ううん なんでもないっ」

「なんかゆり…私に隠してない?」

「え…!? 全然…っ」

「…そう?」

そのままなんとかホームルームには間に合った

外を見れば今日も夕焼け空がオレンジ色に教室を照らしている

ホームルームが終わって直ぐさま教室を出る

「どこ行くの? 今週私たちが掃除でしょ?」

「昨日 灯だってサボったんだから今日は私を見逃して」

「ゆりがサボるなんて珍しいね 急ぎの用でもあるの?」

「うーん…ちよつと かな」

「なにー ちよつとつて」

また頭をわしゃわしゃされる

「うう…灯には関係ないことつ、じゃあ また明日ね」

「……そつか うん、また明日 ね」

私はそのまま1年B組のクラスに向かった

教室に着いてドアから全体を見渡す

しかし、あの子の姿はどこにも見当たらない

（帰っちゃったのかなあ…）

（あ…生物室に忘れたこと思い出して取りに行ったのかな）

そう思い、一階の生物室に行こうと階段を降りようとしたそのとき
だった、階段の上であの子の姿が見えた

…純白の少女

後ろから光る夕焼けの逆光が眩しくて顔は暗くて見えないけれど確
かにさっきのあの子だった

「あ… さっき」

向こうも気付いたのだろうか、私が声をかけようとしたときにはま
た走り去ってしまった

「あ ちよつと待って…っ」

そう言ったときにはもう階段を上っていつてしまった

……

「はあ…」

（…?? なんだろう…これ）

ふと目をやると、さっきまであの子の立っていた辺りになぜかチヨ
ークの粉が落ちていることに気付いた

（チヨークの…粉？）

…理由なんてなかった

溢れ出しそうなくわかんないような気持ち、背中をぐつと押す衝動

ただ、とつさに私も衝動で追いかけた

「はぁ…はぁ」

斜めった階段を一階から最上階の屋上まで全速力で駆け登る

気がつけば私は屋上へと続く扉の前に立っていた

扉のドアノブに手をかけたときだった

「う…っ…っ…ヒクッ」

（…！？ 泣き声…？）

誰だろう、涙をすすする音が私のところにまで聞こえる

耳をすまさなくても、確かにこの扉の向こう側には誰かが泣いている

（あの子… なのかな）

開けるべき…なのだろうか

昨日、ひよりの横で涙を浮かべていた私はひよりに助けられた
でも私には…

そんな力もなければ経験もない

開けて…どうにかできるのだろうか？

…私に

だって…、私だって今傷ついた痛みを嫌というほど抱えている人間
なのだから…

大丈夫だよ、安心して、またがんばろう、…今の私は他人からそんな言葉をかけられたら、きっとその人のことを嫌いになる…

誰かの痛みを誰かが知ることは同等の痛みを知らない人間にはできないことだから

人間なんて、経験して初めてやっと一つ痛みを知ることのできる生き物なのだから

屋上へと続く古ぼけた扉の前…

ちっぽけな勇気すら持たない私にこの壁を開けるだけの勇気はない

（明日…でいいよね…）

教科書とノートと返すだけなのに、こんな過酷な状況、私には無理だよ…

私だって、痛いんだから…毎日

粉々になるほど痛みを抱きしめて生きてるんだから…っ

「う…っ…っ…グスッ…」

逃げるための階段を一步踏み出したときだった…

………

「…だめ…だよ…」

…自分にそう呟く

いつだって私はさ迷う風のように逃げるためだけの言い訳ばかりそんな自分の不器用さが嫌い…、でも今みたいに器用に立ち振る舞おうとする自分はそれ以上にもっと嫌い…っ

だから、やっぱり…開けよう

負けそうな階段を蹴り帰り、振り返る

左手の握りこぶしに爪が肌に食い込むほどの力をいれて、右手に込めた最大限のちっばけな勇気をそのドアノブに目掛けて放つ

そしてそのドアを…開けた

第10話

屋上に続く扉を開けたときだった

その瞬間、屋上に広がる夕焼け空の真っ赤な光が視界に注ぎ込み、眩しくて目を細めてしまう

微かな眼差しで辺りを見渡す

そして…

上を見上げればただ広い空が広がるこの場所の中心に涙をすする小さな少女はいた

（やっぱり…）

私は当たっていた、そこにはさっきの少女が屋上でたった一人立ち尽くしていた

さっきまであんなに綺麗だった大きな青い瞳からは涙が溢れ、もう私みたいな他人が話しかけてはいけないような重い雰囲気漂う

向こうもこっちを見ている

（…どうしよう）

それでも扉を開けてしまった以上、ただ何をする何を言うことも考えず、ゆっくりと少しずつ少女に近付いていく

しかし、その過程でわかってしまった…

こんなにもあの子の涙の理由が

なぜなら、目の前の少女は頭から白いチョークの粉を肩にかかるほどまで被っていたからである

(…あ…っ！)

…自分の中で分かってしまう

もし私のこの仮説が当たっていたなら

机の救難メッセージ

チヨークの粉

そして今の涙の訳

(もしかしたら、この子は…クラスで…)

「…大丈夫…？」

少女の側に歩み寄り、自分でも何を言っているんだと思う一言を吐いてしまう

大丈夫な…わけないに決まっている

だからこんなにも泣いているのに

「……………」

向こうからの応答はない

ただ、涙のすする声が屋上に広がるだけ

少女は乱れた銀色の髪で顔が隠れてしまうほど下を俯いてしまっている

……………

……………

時間は流れ…

もう何時だろう、空がだんだんと夜の空の色へと変わり始めようとしている

校庭からはすっかりソフトボール部や陸上部の活気のある声も聞こえなくなっていた

未だに屋上では、ぽつんと立ち尽くす二人

少女からの返事も全くない

……

「やっぱり、ごめんね… 邪魔だったよね…」

誰に言っているだろうと、自分でもわからなくなってしまふ

わからない…

でも気がつけば、彼女に背を向け、墮落した自分のなんと惨めに胸をしめつける気持ちを抱えながら、ドアに歩き出そうとしている自分がいた

そうだ… そうなんだ…

やっぱり、私には人を救うなどというほどの優しさなんて持ってないなかったんだ

鈍い足を扉へと一歩進めようとした

…そのときだった

「…ありがとうございます」

(…!?)

足がふらつく…

その声の発生源は後ろからだった

その子で確かに小さく途切れ途切れだが、そう聞こえた

しかし、…私に向けられたその声は、真上に広がる遠い遠い空にほうむられていく

なんと返せばいいのか考えすぎて言葉に詰まる…
思い、さ迷い声なき声が自分の喉に刺さる

（ねえ、灯…灯なら今どうするの？）

（ねえ、ひより…ひよりなら今どうするの？）

わからない、でも違う…

諦めないから…諦めたくないから私

風に吹かれながら、情けないほど小さな勇気をまたもう一度振り絞り、一度は背を向けてしまった少女にまた一度振り返る

すると、驚くことにそこには、俯き涙をすする少女の姿はなく、あのとき私が初めて見た真っ白な綺麗な少女の姿があった
涙の笑顔を浮かべて

「あ……っ！」

思わず、声を出すことを忘れてしまう

「あの…ありがとうございます」

そう言うと、目の前の小さな少女は私に向けて深々とお辞儀をした

「…えっと」

なぜだろう、私は何かこの子にお礼を言われるようなことができたのだろうか…

決心しと振り向いた瞬間だっただけに余計に驚いた

少女はまだ涙で潤んだ瞳で私を懸命に見つめている

一つの悪口でも今のこの子には重大な傷を与えてしまいそうに思う

「この学校で… 声をかけてくれたのはあなたが初めてでした…」
「それって… どういう意味で…」

それからお互い目を見て、そしてゆっくりと片言ながら話し始めた
「実は 有珠… 転校してきて…」

「アリス…？」

「あ… 私の名前で…」

（あ… 有珠ってアリスって読んだ…、ちょっと不思議な名前）

「初めまして 桜月 有珠 （おうつき ありす）って言います」

「さつきは… ごめんなさい… その 有珠 人見知りだから…」

「そうだったんだ… あ でも私も人見知りだから大丈夫だよっ」
「なんだろう、自分だって人見知りのはずなのに、この子には全く
そんなことが嘘かのように口が動き、言葉が届く」

「初めまして 小林 ゆり って言います…」

自己紹介なんて自分からするのは何年ぶりだろう

「… よろしくお願いします」

「そういえばさつき 転校してきたって言ってなかったっけ？」

そう問い掛けたときだった、有珠ちゃんはまた顔を曇らせてしまう

「はい… 今学期から転校してきて… でも」

有珠ちゃんはそう言うと、悲しげな目をしてチョークの粉のかかった
荒れた髪を触る…

（あ… っ）

やっぱり私の推測は当たっていたのだろうか

私はそんな気持ちからなのか次の瞬間、自分でも驚くような言葉を
発してしまう

「あの…もしよかつたらなんだけど」

「…??」

「私の家ね 今家族も誰もいないからシャワーでその髪落とす?」
どうしてこんなことを言ったのか自分でもよくわからなかった、ただこれが私にできる、‘優しさ’だと信じて

「…でも 初対面でそんなご迷惑な…」

「迷惑なんかじゃないよ? …でもやっぱりおかしいかな」

今会った初対面同士、いきなり人の家のシャワーを貸してあげるなんて言った自分に、よくよく考えてみればおかしいと思ってしまう

「もし…有珠ちゃんがよければ なんだけど」

そう付け加えて…

「その髪のまま 家に帰ったら…だつて」

「えつと…でも はい…もし ゆりさんがよければ有珠…」

「うん」

「貸していただきたいです…」

不安そうな顔でも優しい声でそう答えてくれた
よかった…、自己満足かもしれない

でも自分なりの優しさを伝えてあげれた瞬間だった

「うん じゃあ」

「あ… はいっ」

そして、このとき初めましてこの子の笑顔を見た

気休めにしかないかもしれないけど、一応私は学生カバンに入っていたタオルで有珠ちゃんの頭のチョークの粉は落としてあげた
(誰が…こんなこと…)

見た目は多少よくなったものの、やはり触つてあげるとその綺麗な銀色の細い髪はガビガビに固まり粉っぽく触つていて私のほうが苦しく思う…

その間も有珠ちゃんはどこか寂しそうな顔をしていた

そしてそのあと私たちは屋上を後にして、私の家へと向かった

………

その帰り道の最中も、まだ警察のパトカーのサイレンが鳴り響いている

その恐怖と不安を紛らすために、私は普段の人見知りのときとは思えないほど、灯やひよりのこと、クラスのこと、好きなアーティストのこと、そんな他愛もないことを有珠ちゃんに話していた

一つのきっかけでもあった教科書とノートも返して

そんなときも横で笑顔を見せている有珠ちゃんは、どこか裏では悲しそうな表情をしていた

（有珠ちゃんも、私とはまた違う痛みを抱えている人間なんだよね…）

ひよりのように痛みを克服もできず、灯のような平凡な日々でもなく

…今、この瞬間も消えない痛みを抱え生きている

でも、だからこそ

きつと有珠ちゃんは一人ぼっちじゃだめなんだと思う…

私は灯やひよりと一緒に過ごすことで今も痛みを和らげようとしている

有珠ちゃんだって、例えば痛み理由なんて知らなくても、例えば言え

ない隠し事があつたとしても、きっとあの二人にも仲間にも笑える友達にだってなれるはず

（今度、有珠ちゃんに二人を紹介しよう）

そんなことを思いながら、私たちは家に着いた

有珠ちゃんは私の二階の部屋に待っていてもらい

私はお風呂場へ向かい浴槽にお湯をおとしていた

そんなときだった、上の階からガタンツと物凄い音が響く

（……??）

「有珠ちゃんー？ 大丈夫ー？」

……

二階からの返事はない……

（……??）

不思議に思つた私はお湯を止め、有珠ちゃんのいる二階の私の部屋に向かう

部屋のドアをガチャツと開ける

「有珠ちゃん何か物凄い音してたけど……」

しかし、私は目の前に広がる光景に驚いた

そこには床にへこたれこみ、小刻みに震えている有珠ちゃんの姿があつたからである

「有珠ちゃん……っ！？ 大丈夫っ！？」

へたりこんでいた有珠ちゃんに歩み寄る

「あ……っ あ…… あれ……っ！」

「……??」

有珠ちゃんが震える声で指さしたその先

そう…ちょうど、あれ、がいる押し入れの場所を指さしていた

…その瞬間、私は頭を何かでおもいつき叩かれたような衝撃が駆け巡る

なぜなら…

開いているはずのない

開いてはいけなはずの目の前の扉は完全に開いており、まぐる…

いや リリスの姿が有珠ちゃんにも私にもさらされていたからである

第11話

「あ、有珠ちゃん…っ あ あのねっ これはっ！」

今までにないくらい取り乱してしまう
なんと言いついても状況が不利になる一方…

今は真犯人が違つかなんてことは関係ない

…問題は、ただの私みたいな女子高生とは無関係のはずのものがここに
にあること

目の前に広がる身の丈ほどのもある立派な凶器、まぐろの大刀リリース
それが…なぜここにあるのか

昨日のひよりに見つかったもう一つの片割れの‘体温’

しかし、リリースが見つかったしまった今、状況は昨日より格段にま
ずい…

言い訳が見つからない…

「有珠ちゃん……」

有珠ちゃんはまだに横でへたれこみ、体を小刻みに震わせ、リリース
を見上げている

顔はまるで、恐怖の衝撃に満ちていて…今にも泣き出しそうな

無理もない、いや…当たり前だ

こんな魚でもない生き物でもないような化け物を、まさか見るこ
とになるなんて誰が考えていただろう

ましてや有珠ちゃんのような…まるで幼い子供のような子が、いき
なりこんなものを見たのだから

「あ 有珠ちゃん……」

……
とても隠せそうにもない

言葉での言い訳も嘘も口車も、私が得意なわけもなく…

肩を落とし、気持ちが折れかけ

…きっと私しか知りえない今の連続通り魔事件とのこと、一回海で死んでいること、目の前の少女に全てを話そうと諦めかけた

…そのときだった

「あ…」

泣き出しそうな顔をしていた有珠ちゃんの口から小さな言葉が漏れた

「えっと…」

なんだろう、…何かを言おうとしている

「有珠の好物ーっっ」

……

……

(????)

「は…?」

一瞬、この子が何を言っているのかわからなくなる…

「有珠ねーっ まぐろ大好きー」

いきなり立ち上がり、大きな瞳を輝かせながらぴよんぴよこし始める
「ゆりさんのお家は漁師さんですか? いいなー やっぱり漁師さ

んのお家だと家族一人にまぐろ一匹とか貰えるんですよねーっ」

（…なんでだろう）

あれだけ悩んでいた自分は一体…

というかこの子、本物の天然っ子？

「あ… 有珠ちゃん」

「はいっ？」

「そんなことよりお風呂…入って来れば？　ね？」

「…あ　有珠　すっかり忘れてました」

さっきまであんなに落ち込んでいたはずの少女は、まぐろを見るやいなや、いきなり小さな子供のようにはしゃぎだした

（そんなにまぐろが好きなのかなあ）

部屋を出ようとしたときだった

「今度　ゆりさんがよければまぐろ食べさせてくださいねー　ではシャワー借りさせていただきますっ」

「うん　バスタオルは置いてあるからね」

「ありがとうございますっ」

ドタドタと階段を駆け降り、さっきの泣きじゃくる姿がまるで別人のように思えてしまう

（今度…　本当にお寿司屋さんにでも誘おうかな）

（それにしても、この子は一体…）

生物室初めて会ったときは身なりは本当に小学生のようだったけど、髪は銀色、目は青、肌もありえないくらい純白な色白で

(…だからかな)

無口なツンツンしてそうな誰とも話さないようなそんなキツイ印象を受けた

次に見た屋上で泣きじゃくる彼女は見つけたときは、第一印象で感じたキツイ印象ではなく、本当にか弱い少女のような姿で、私は純粹に彼女を…助けたくなった

そして今、もはや当初感じたキツイ印象はどこへやら…

ありえないほど笑顔でまぐろを語り、しかも異質なあれを見てただのまぐろ呼ばわり…

しかもさすがに漁師さんのお家でも家族一人一人にまぐろ一匹はありえなさすぎる

天然と呼ぶべきか子供と言うべきか

本当に彼女は不思議すぎる…

人見知りの私がこんな短時間で仲良くなれたことにも驚きであるが

そしてそのあと、お風呂から出た有珠ちゃんと私は少しだけ話をしたそう…私が家に帰るまでに考えていた有珠ちゃんに灯やひよりを紹介すること

そのことを話したとき、一瞬有珠ちゃんの顔が暗くなったものの、なんとか納得してもらえた

私も人見知りだからわかる…

他人に会う話す接する、それがどれだけ不安で怖いことか

でも…それでも有珠ちゃんの抱えている問題は、また私と違う重い痛みだと思っから

友達って…本当にいいものだから

灯のように、ひよりのように

（いつか痛みを越えて…、私も他人にそう思われてみたいな）

そして有珠ちゃんを玄関まで見送る

「じゃあ バイバイ」

「はい 今日…あの 本当にありがとうございました」
屋上するとき以上にまた深々とお辞儀をされてしまった

私がおかを言う前に有珠ちゃんが振り返り歩き出そうとしたときだった

口が勝手に言ってしまったとしか言いようがない

「有珠ちゃんっ また明日ねっ」

今の自分にこんな笑顔ができたんだと思ってしまふほど、笑顔で有珠ちゃんを見送った

「はい また明日ですっ」

向こうも笑顔でそう言いながら笑ってくれた

そして私たちはお互いの笑顔を確かめ合うかのように別れた

- また明日ねっ -

短かな…

本当に短かな、その魔法の言葉を口ずさみながら

……
……

- 午後 - 7時

有珠ちゃんと別れ、相変わらずの一人の家で晩御飯を食べる

こんな静かなご飯の寂しさを紛らわそうと、見たいものがあるわけでもないテレビをつける

この時間はまだドラマもやっておらず、どのチャンネルもニュース番組だった

やはり気になるのはあの事件…

そして、やはりこの事件はテレビでも大騒ぎになっていた

嫌でも長々と情報が流れてくる

いったん箸を置き、テレビから流れてゆく情報に気を集中させ、今警察がどこまで犯人の情報を掴み、あの二つの秘密が分かっているのか携帯のメモ帳のツールにまとめて打ち込んでいく

・犯人の犯行は深夜

・第一、第二、ともに犯行現場は聖蹟桜ヶ丘駅、駅前通り

・犯行に使われた凶器は二本

・二人の被害者の証言では、この凶器は‘魚’のような形をしていた

・犯人は過度の低体温の可能性あり

そして警察は全面的に捜査を開始、駅前、及び周辺に監視カメラの設置

今ニュースでは一番と言ってもいいほど不可解で注目されているこの通り魔事件は、今のところニュースで知りえる情報はこのくらいだった

一昨日に灯とのたわいもない話でこの事件を偶然知り、まぐろの正体もリリスと知った

昨日はひよりと友達になり、体温は見つかったものの今唯一私以外にこの私の秘密を知っている友達になった
そして今日、第二の通り魔事件が起こり、…でもなにより有珠ちゃんと出会えた

でももつと、今度から気をつけよう…

（それにしても、最近…いろいろと疲れるなあ）

………

………

今日はそんなことを思いながら眠りについた

第12話

私はここ数日の新学期を迎えたとともに生活は大きく変化した

いい意味でも

…悪い意味でも

- 9月4日 - (木) -

- お昼休み -

しかし相変わらずここはいつもと変わらない平凡な風景が広がっている

昼下がりの教室から見える空には入道雲が漂い、清んだ青々とした快晴の空はどこまでも高く広がっている

そんな空のもとで私たちの日常は繰り広げられている

灯と向かい合うように席をくっつけ、ひよりがお弁当を持ってやってくる

人と仲良くなるとは思議なもので、ひよりとはもうすっかり仲良く話せるようになった気がする

「また灯ちゃんはいつものパンでしょうか？」

「もちろん！」

灯は即答するとまたもこの学校最強の不人気パン、抹茶いちごメロンパンをぐいっつと強調して私やひよりに見せびらかす

「灯… たぶん早死に思うよ…」

「なっ！ どうゆう意味だー このちびっこ」

そう言いながら灯は私の頭を雑にわしゃわしゃし始める

「にゃ」 髪があ」

「…お二人とも じゃれあうのはいいですが お食事の後にしましょうね」

灯と私がそんなことをしていると静かに横でお弁当を食べていたひよりに冷静に注意されてしまう

（あ … そういえば）

ふと教室の時計を見る、もうどのクラスも4時間目の授業が絶対終わっている時間だ

（有珠ちゃん… 来れないのかなあ やっぱり B組 覗きに行ってみようかなあ）

「灯 ひより ちょっと用事思い出しちゃって…」

「?? おおー いつてらー」

「はい いつてらっしやい」

半分食べかけのクリームパンとほとんど飲んでいないリプトンを机の上に置いたまま、灯とひよりのいる教室からいったん出ようとした

…そのときだった

ふと視界を斜め下に向ける

するとそこには私たちのいるE組の教室の扉の隅にこそそ隠れて一人縮こまって中の様子を伺っている子がいた

（ビク…っ!?!）

つい二度見してしまう

それはまるでモルモットやハムスターのような小動物を思わせる姿だった

（な、なんだろう…この変な生き物…）

しかし…それはよく見れば
…銀色の髪に、小学生並の身体

そう…まさしく有珠ちゃんだった

…っ！！？

「あ 有珠ちゃんっ！？ ……どうしたの！？」
自分でもこんなあわてふためく発した声に驚く

「あ ゆりさん… こんにちは」

扉の隅からこっそり中を覗き込むように縮こまっていた有珠ちゃんは悠長に私に向けてそのままの体制でぺコッとお辞儀をした

「あ こんにちは」

「エヘヘッ」

ニコッと可愛い笑顔を向ける有珠ちゃん

………

「って こんにちはじゃないからっ」

「はう…！？ ……ごきげんよう？？」

「そっちでもないっ どうしてその形状でここにいるかだからっ」

「あ…うう えっと…」

有珠ちゃんは立ち上がりもじもじし始める

（もしかして…）

………

「一人で入って来るのが怖かった…のかな？」

「…こくっ…」

よく考えれば、私だって人見知りで、ひよりとだって初対面るときは怖かったし、有珠ちゃんが今同じ状況にあることを考えれば迎えに行つてあげるべきだったと、いまさらながら後悔する

振り向き灯とひよりのほうを見る、今は私たちのほうではなく校庭のほうを見て話しているようだった

「有珠ちゃん　じゃあね　私と一緒に行こう？　ね？」

「…はい」

有珠ちゃんは私の左腕をしっかりとにぎりしめ私に隠れるようにして、灯とひよりの元へ戻る

こうしているとまるで妹が出来たようなことを思ってしまう

「おー　ゆり　お帰りさー」

「ゆりちゃん　お帰りなさい」

「ただいま　…えっと」

腕にしがみついたままのこの子をどうすれば…

「ゆ、ゆりーっ!？」

灯が私の左腕をビシッと指差す

「あ…　灯　ひより　あのね…」

そういえば…なんて有珠ちゃんを二人に紹介するか決めてなかった…っ

「ゆりーっ　右腕から幼女が生えるよーっっ」

「あら…　本当ですね」

そんなことを考えているとどんどん変な方向に進んでしまう

しがみつく有珠ちゃんをゆっくり灯とひよりの前に出してあげる

「えつとね… この子は一応私たちとタメだから…」

「「……………っ!?!」」

(な、なんだろう… 空気が冷たい)

「ゆり? それは詐欺っていうんだよ…?」

「まさしく私も同じ意見です」

……………

……………

そのあと、私の精一杯の体中の細胞フル動員で語り、説明してなんとか灯とひよりにもわかってもらうことができた

しかし、有珠ちゃんを灯とひよりになんとか紹介はできたものの…、席に座った有珠ちゃんは相変わらずおどおどしている

「あれ…??」

私は有珠ちゃんや二人に説明することで必死で気がつかなかったが、さっき机に置いたはずの食いかけのパンがなくなっている…

(私、食べ終わった… っけ??)

私が疑問でいっぱいになっているときだった

「あ ゆり ごめんね 実はさっきの食いかけクリームパンあたしが食べちゃった」

灯がくしゃつと見せた満面のスマイルで机の中からごそごそと私がさっきまで食べていたクリームパンの袋が現れる

(にゃーっ まったく… こいつは)

スマイルの灯の横に視界を向ければなぜか有珠ちゃんはひよりのお膝の上に静かに座らされ何か話していた

いつも優しいはずのひよりがなぜか黒く見える…

「有珠ちゃん ひよりお姉ちゃんのお膝と一緒にご飯食べましょうね」

「…ありゆ…」

有珠ちゃんの困った顔がどうしようもなく愛おしく見える
大人っぽいひよりのお膝にぽつんと縮こまって座らせていると、
よけいに有珠ちゃんがお人形のように見える

でも、何らかんら有珠ちゃんは困ったさんな顔をしているけど嫌なわけではなさそうだ
むしろ真っ白な頬つぺを染めているあたり、ちょっとはうれしいのかな

「ねえ ひより？」

「はい 为什么呢うか？」

有珠ちゃんをクッションか抱き枕のように抱きしめているひよりが
答える

「ひよりって図書館好き？」

これは前々から思っていたことだった

身長や顔立ちは大人っぽいけど、その真っ黒なサラサラロングと黒ぶちの眼鏡、目にぎりぎりまでかかる前髪

第一印象に関して言えば、よく言えばおしとやか、悪く言えば地味かも…

そんな文科系女子まっしぐらなひよりはイメージ通り図書館とかに
いるタイプなのだろうか

そんなことを思ったりしていたのだった

「図書館ですか？ そうですね…好きですよ」

「やっぱり そうなんだ」

なんでだろう、物凄く納得できる

もし図書室や図書館にひよりがいたら確実に敬語で話しかけてしまいそうである

「しかし…強いて言えば私は同人誌が好きですね」

……

ど、同人誌……！？

「そ、そうなんだ…っ」

一瞬ひよりのキャラがわからなくなった…

（どうしよう…）

ひよりの新しい一面を知ってしまった気がする…

まさかひよりがそっち系だとは思わなかった

しかもなぜだか今のひよりの顔はどこか満足げでうれしいそうな顔をしている…

そのあとひよりからはいつもと何ら変わらない静かな笑みで、綺麗にオタク関連のことを語られ

その間も語るひよりのお膝の上では有珠ちゃんがどこからか出したもわからない、まるごとバナナを一人黙々と食べていた

灯にいたってはご飯をとくに食べ終わりチュッパチャップスをくわえて窓から顔だけをぶらーっと出して、なにやらもごもごと歌っている

（なんだ… このフリーダムな空間は…っ！？）

私の新しいお昼休みの日常はそんな平和な風景が広がっていた

第13話

昼下がりのア然とするまでにフリーダムだった光景が終わって、今は放課後

私たち四人は集まる約束をするわけでもなく、またE組の教室に集まっていた

お昼のときとは違い、今は教室はがらんとしていて、窓からはまた一段とオレンジ色の夕暮れが教室全体を照らしていた

もう夏が終わる…そんなことをどこか感じさせる夕暮れ空だった

この時間にもなれば、学校にはもう部活の人以外は残っていない
そんなほとんどからっぽの校舎の中、私たちはひよりの紹介で、ひよりいわく‘秘密の場所’に案内されていた

その存在があったこともわからないような4階の隅の古臭い地味な教室の前に来た、何にも使われていないようなこの部屋は同じ校舎とは思えないほどひっそりがらんとしてる

ひよりが教室の扉の前に立つと古びた扉に付けられていた鍵を普段からやっているのか慣れた手つきで外してゆく

そしてガカツつと鈍い音を鳴らしながら扉が開く

中に入り、教室の中を見渡せば…やけに埃っぽいどんよりした空間、段ボールの山、積まれたイス、ほかにも年に一回しか使われないような行事用の品々が埃を被って積みまれている…その光景は教室という倉庫と言った表現のほうが近いかもしれない

そんなことを思っていると、早速灯と有珠ちゃんは半分以上物置部屋とかしているこの部屋で子供のように積みまれた物を物色し遊んでいる

私は、教室の窓を開け一人窓から外の景色を眺めていたひよりのほうに歩み寄る

…少し、お昼休みときにはあまりにあわてふためいてしまい気がつかなかったが…

「ねえ ひより？」

…気になったことがあった

「はい 为什么呢？」

「さつき有珠ちゃん…普通にお膝に座らせてたけど…その」

「ああ…はい 大丈夫でしたよ」

「あれは…大丈夫だったの？」

言葉が詰まる、口に出しては言いづらかった、…いや、ひよりの痛みを簡単に口にしては言えなかった

「わざわざ…気遣っていただいてありがとうございます」

空を見上げ、ひよりが一人呟くように話し始める

「前にもお話しましたが私は極度の接触障害を患っています」

「…うん」

「それは今この瞬間も同じことです…しかし 前にも言った通りさっきのように今は何とかこのくらいまでは回復しましたので」

「…それにお膝に座らせたのは、あの、有珠ちゃんだからということもありますね」

「私はこの異質な身体なので 分かるんです…安全な人間か そうでない人間か…」

「わかりやすく言うと触っても大丈夫な人かと言うことですね」

「しかし、たとえ安全な人間であっても 相手側からいきなり自分の思わない、想像しきれない、または反射しきれない場合に接

触されると…もしかしたら今でさえも 灯ちゃんでも有珠ちゃんでも…もちろんゆりちゃんですえも私はパニックになるかもしれません」

「自分の意識の中ではたいだい大丈夫ですが、無理に相手から気安く触られることには…それが男性や大人の方ですと…自身の意識の内に触ったとしてもパニックになってしまうかもしれません…私の接触障害という病気はそういうものです」

他人事のようにあつさり語ったひよりはそう言うと、そつと私の頭を撫でた

まるで今話していた接触障害の恐怖を自分自身であざ笑うかのよう…優しく

今もひよりのその身にまとうぶかぶかの紺色のカーディガン、それが本当に今もひよりを守っているような気がした…その瞬間、夕暮れとともに気持ちのいい秋風がこの教室を通り過ぎてゆく、それと同時にひよりの綺麗な黒髪がなびいた

「ねえ ゆり ひよりーっ」

ひよりと話していると、物を物色するのが飽きたのか、灯とその後ろにすっかり灯とも打ち解けたのか仲良しそうに有珠ちゃんが近づいてきた

「来月のBUMP OF CHICKENのライブチケット あともう一枚余ってたじゃん？」

「?? そういえばそうだったね」

「だったらさー 有珠も一緒に連れてってあげようよーっ」

灯が笑顔でそう私とひよりに尋ねる

（確かに私も有珠ちゃんとも行ってみたい）

「うん 私もチケット余っちゃうくらいなら有珠ちゃんと一緒にいきたいし 大賛成だよ」

「でも有珠ちゃん本当にライブ 一緒に行きたいかな？」

ひよりが灯の後ろにいた有珠ちゃんにそう問いかける

「…うん 有珠も…一緒に行ってみたい」

視線を下におどおどしながら、不安げにそう答える有珠ちゃん

「そっか…はい わかりました 有珠ちゃんっ では皆で来月絶対一緒に行きましょうね」

「うんっ」

そう言つてひよりは安心させるように優しく有珠ちゃんの銀色の頭を撫でた

…灯もひよりも、今の有珠ちゃんの痛みの中とは知らないわけで、今もこんな笑顔でいる有珠ちゃんにも決して私以上かもしれないほどの大きな痛みを抱えているわけで…

クラスに戻れば…現実に戻れば、また痛々しいほどに押し寄せてくる痛みと戦うことになる

答えようもない問題は今なお私たちの前に漠然と存在し苦しめている…

でも…

それでも…

ただ、今…ここにいます

ここに四人いる、偶然かもしれない…けれど、ここには笑っている仲間が確かにいる

それが、灯にとっても、ひよりにとっても、有珠ちゃんにとっても…もちろん私にとっても

世界から見れば本当に小さなものかもしれない、でもそれでも…私が私でいれる、私が私として笑える
かけがえのない大切な場所だから

（来月のライブまでに犯人…捕まればいいな）

そんなことを秋の匂い漂うこの夕暮れ空に想ったりするのだった

………

この教室も窓を開けっ放しにしていれば籠りっぱく空気を感じることもなく、この学校最上階の4階ということもあって窓から見える景色には遠くのほうに駅前が見え、辺りには多摩川や丘が見えるまでに高く、本当に綺麗に見える、確かにここがひよりの秘密の場所ということだけはある

ひよりは相変わらず窓に手をかけ外の景色や空を眺めていた

灯はそこらへんに置いてあったイスに座り、有珠ちゃんをお膝の上に乗せ、灯の携帯のワンセグと一緒に何か見ているようだった

学校という場所は家のような邪魔な電波や妨害もなく、ましてや高い位置にある建物なので学生がワンセグを見るには最高と言ってもいいほど適した場所である

家ならアンテナのマークが一本だが、ここならどこにいても三本にはなる

これもまた、学生の暇つぶしの知恵かもしれない

（でも…）

ふと私も携帯を開き時計の表示を見る、… 5時2分

（私たちがこの時間にワンセグで一緒に見るような番組… あったっけ？）

そんなことを思っていた

「ねえ 灯？」

「なー？ どうしたゆりー？」

「さっきからなに見てるの？ 有珠ちゃんと一緒に」

「あー 実はね 有珠まだ知らないんだって」

「…？？ 何を？」

「今この街最大の話題… 例の通り魔事件さよーっ」

（…っ！！？）

「…？？ どうしたのゆり？ 顔色悪いよ？」

…っ！！？

「あつ… い いや…っ なんでもないっ」

鼓動がありえないほど早くなる、極度の動揺で心拍数が急激に上がる感覚が自分でもわかる…

「…？？ …そう？ まあいいや」

そしてその間にも携帯からはニュースが流れ、有珠ちゃんが真剣な眼差しで携帯を見ている…

魚のことも…

体温のことも…

窓からの景色を眺めていたひよりもさっきから私のほうを心配そうにちらつと見ている

この中で…ひよりだけは私の真実を知っている…

そのときだったっ

外からパトカーのサイレンが物凄い音を街中に響かせながら学校の近くを通過してゆく

(…ドクンツ)

体中の血が冷たくなるような、凍り付くような冷や汗…

夕焼け空も、もう夜空へ日を落とそうとしていたときのことだった
パトカーが通り過ぎ一安心したときだった

…有珠ちゃんの次に発した言葉で私の心情に致命傷を与えた…

「あ そういえば ゆりさんのお家 まぐろさん置いてありましたよねー」

…っ!!!?

携帯を見ていた有珠ちゃんがふと呟く

「あ 有珠ちゃん…っ」

私は、つい衝動で有珠ちゃんの口を手で塞いでしまった…

「きゃっ 冷たい…っ!？」

(…っ!!!?)

(し、しまった…っ 私は何を…っ ど、どうしよう…っ)

もう自分でもわけがわからない…っ

有珠ちゃんに自分から体温のことをばらしてしまうようなことを…

もう…完全なパニックになってしまっていた

……
灯の顔を恐る恐る見る…

「ゆ ゆり… あのさ…」

「ち 違っんだよ…っ 私は通り魔となんて関係なくて…っっ」

「…あたしは別に まだゆりが通り魔だなんて一言も言っていないよ？」

「…！！」

……

……

空気が…重い

できることなら…今すぐにも逃げ出してみたい…

第14話

日も落ち、暗い教室の中…電氣をつけることも忘れ

灯はお膝に座らせていた有珠ちゃんを静かに下ろし、私たちは動くこともなく言葉を交わすこともなく、微かな光のある闇の中で目を合わせ、立ち尽くしていた

目を合わせる、とは言ってもこちらからは灯の顔は全く見えない…しかし、今の灯からは眼差しは私への疑いの目であることは明らかである

……………

身体も動かせず、15分前まではあんなに幸せ色だった空間は、今や時が止まってしまったのではないかと思うほどに重く苦しくざらざらとしたにがい空間が広がっている

……………

「ねえ… ゆり…」

その重い緊張を解く…いや、増すように灯はそう呟き…続けた

「今から駅前とか… 一緒に行けないかな…」

(…!?)

「今日は… その ごめん…」

どんどん自分が追い込まれていくのが、まるで秒読みのようなペースで身に傷みとして突き刺さる

昨日見たニュースでは警察は駅前を集中的に捜査し目を光らせていることは間違いない、いや…それどころか監視カメラの増設、パトカーのパトロール

今の駅前に私が行くことは、どうことになるのか…灯にはわかって
いるんだ

犯人か犯人じゃないか…そんなストレートな問いではなく、間接的
な意味で問い詰めて言うあたり…やはり灯らしく思う

「…そう」

目の前に顔を闇で隠している灯は確信したように、そう返事をした

頭が痛い…お腹が痛い…

胸が締め付けられる痛み…

冷や汗が止まらない

………

しかし、次の瞬間、私を救ったのはひよりだった

「ゆりちゃんはこの通り魔事件の犯人ではありませんよ」

窓際にいたひよりが呟く

「ひより…？ どうして…？？」

不意打ちのようなひよりの言葉に灯は驚きながらも疑問で返す

「ゆりちゃんは この件に関しては…いろいろな悩みや痛みを持っ
ております」

ひよりはそう語りながら闇に包まれていた教室の電気をパチッとつ
ける

「…ねえ ひより…」

灯は私ではなく、今度はひよりと話し始めた

有珠ちゃんに関しては事の発端でもある、私の部屋の押し入れにあ
るまぐろの発言をしてしまったことが今のこの状況を作ってしま
ったのだと理解したのか…教室の隅で縮こまって目に涙を浮かべて

しまっている

「なんでしよう 灯ちゃん」

「どうして……」 ひよりがそんなゆりだけのこと知ってるの？」

（！？ ビクッ…っ！？）

灯が深々と痛いところを的確に突いてくる

今の灯は普段の適当な灯とはまるで別人のように鋭く…どこか怖い

「それは……」

そしてその問いに初めて見るひよりの困った顔

私がひよりの接触障害のことを他人に簡単に口にできないように、
ただでさえ優しいひよりは、私のこと気遣ってくれているのだろうか
今…私の痛みのことを決して口にしようとはしなかった

……

もう…見ていられなかった…っ

「ちっ 違うんだよ灯っ！」

灯のひよりの間に無理矢理わって入る

「何が違うのゆり…？」

横に困った顔をしていたひよりに目で合図する…

「その…ひよりには相談に乗ってもらって…」

「そう…… ひよりに……」

「…うん…だから…その…」

苦しい…

灯の目が見れない、私は…逃るように俯き灯から目をそむけた

ひよりも私を助けようとしてくれたのに…今では俯いしまっている
有珠ちゃんにいたっては地べたに座り込み涙をすすってしまっている…

………

………

四人そのままの状態ですらに10分ほどの時間が経ってしまった

「…ゆり………」

最後にそう呟いた灯は、その瞬間、いきなりこの教室の扉をおもいつきり…ダンッ！ と開け、教室に大きな音が響いたと同時にそのまま走り去ってしまった

「「………っ！？」「」

声を出そうとしたときは、もうすでに灯が教室から走り去ってしまった
っていた後だった

「あ… 灯………」

(………っっ)

追えなかった…

いや…わからなかった…どうすればいいのか

ふと見た教室の窓…

そこに映っていた、残酷に打ち付けられた 臆病な自分の姿…

教室に取り残された三人

(…もう どうでもいい…や)

………

もう…そこから先はよく覚えていない…

ただ…ひよりが教室の片隅でぼろぼろと泣いていた有珠ちゃんをずつと慰めて励ましてあげている懸命な姿だけしか

それなのに、そんな中で私はひよりに一言言つて

その場から立ち去り…帰ってしまった

いや、逃げ出してしまったというほうが正しい

なぜなら…私も…有珠ちゃん以上に抑えられそうになかったものがあつたから…っ

(…っ…う…あ…)

………

一人ぼっちの帰り道

真つ暗な街の雑踏を潰すように歩く…

誰にも見つからないよう…涙を隠しながら

「はあ…っ…グスッ…う…」

必死に涙をすする声を堪える

あまりに苦しくて呼吸を調えようとふと上を向いた
そこに映つたものは

広大な真つ暗闇の空に一つ浮かぶ綺麗な月影…

（灯も … 見てるのかな…）
そんなことを考えては意味もなく後ろを振り返る

こんなちつぽけな夜、家へと続くいつもの道、意味もなく何度も何
度も振り返る…

今日だけは吹き抜ける風が少し痛く、月影の光だけでも目にしみた

「…灯…」

今日は、そのまま

朽ちるように…月明かり照らす夜の下、ベッドの隅で静かに意識を
閉じた…

第15話

- 9月5日 - (金) -

全てが無意味と思えたこんな私の世界でも、また無造作に残酷に…
日常というモノは繰り返し、昨日が笑ってようやく泣いて過ごして
いようが、世界の日常は平等に時と共に流れてゆく

「…ん…」

新学期が始まって初の週末、金曜日

霞む目でまた今日という日に起きてしまった

ぼんやり起きた始めの意識の中でやはり最初に思うことは昨日のこと

灯が警察に私のことを言ってしまったてはいないか

灯とは…もう友達としては会うことはできないのではないだろうか
ひよりと有珠ちゃんをあの場に置き去りにし、…二人とも怒ってい
るのではないだろうか

昨日のことを一つ考えただけで、過度な不安は頭の中で何千という
心配事を無限とも思えるほど書き立て作り立てしてしまう

(どうして…私なのかな…)

心の中で独り言のように呟いた

二度目の生を受け、その代償とでも言うような二つの深い痛みを背
負わされ

たった一人の親友も、新しくできた友達にさえも枷となって立ち塞
がり

今でさえも生き返った自分の…生きている意味が分からない

ふと昨日、ベットの隅に置いた携帯の時計の表示を見る

… 9時30分

とつくに授業が始まっている時間だ

(そっか…)

私はいわゆるずる休みをしてしまった

「はぁ… もう今日はいいや」

ふて腐れるように、風邪をひいたときのようなだるい身体でベッドから起き上がり、虚ろな目でリビングへと向かう

やることなんてない

テレビも見たくない

軽い鬱状態だった…

この一週間、本当に長かった気がする

出会って…驚いて笑って呆れて泣いて…離れて

思い出をさかのぼるようにこの一週間を振り返る

そうやって、ただぼんやりとソファに座っていたときだった

ブーッ… ブーッ… ブーッ…

(…???)

パジャマのポケットに入れてあった携帯のマナーモードが鳴る
カチッと携帯を開く

- 着信メール2件 -

「…??」

携帯の受信ボックスを開き、誰からのメールか確認する

(…???)

そこに表示されていたのは

- 未読メール -

綾瀬 ひより 3件

桜月 有珠 3件

(ひより…? 有珠ちゃん?)

私がついていなかっただけで、受信時間を見るに私がさっき起
きる前からメールは送られていたようだった

「ひより…有珠ちゃん…」

二人のメールを一番最初に送られてきた下のほうのメールから恐る
恐る読み始める

- 本文 -

「ゆりちゃん 昨日の一件は本当に申し訳ありませんでした…
今は大丈夫でしょうか？」

灯ちゃんのこと心配ですが、私はゆりちゃんのこと心配です
私と有珠ちゃんは今でもお二人を変わず大好きでいますよ
ひより」

「ゆりさん、昨日は有珠がまぐるのこと…なにも知らないくせに灯
さんの前で言っちゃって

本当にごめんなさい

でも、有珠は…こんなこと言ったら怒られちゃうかもだけど、ゆり
さんも灯ちゃんのこととずつとずつとだいきです」

「…あ…ひより…有珠ちゃん…」

……
なんでだろう…

どうしてだろう、この胸の奥からこれほどまでに溢れ出しそうになる気持ちは

まだ一人ぼっちじゃなかったんだ

そう思えたこと

嫌われてなど…いなかった…

それどころか、私みたいな気持ち悪い子になんかに心配もしれくれて…まだ友達でいてくれて

それは私の閉ざそうとしていた心に強く強く語りかけ

その本当に数列の短い文章は

今の私には、どんな言葉より優しく思え
どんなものよりも温かくて

そう…、それだけ…ただそれだけなのに
さりげなくでもなく、大袈裟でもなく

奥底から、滲み出るほどまでに溢れてきた
自分でも原因不明な感情に声にならない…

「グスツ…はあ……っ」

ひよりがどんな想いでこれ書いたのかとか、有珠ちゃんがどんなに悔いた想いでこのメールを送ったのかとか…

それを考えただけでもう…涙が溢れ出しそうになっている自分がいた

「…ごめんね…」

電気も付けない白黒の部屋、ソファアの片すみでたった二通のちっ

ばけな短文メールに君から…君たちから貰った優しさの言葉が心に染みて…っ
なんて、ちっばけなものだろう…たった二つのメールでここまで喉が震えるとは

画面がぐじゅぐじゅに鮮やかに染まる瞳で残りの4件のメールも見る

- 本文 -

「ゆりちゃん 学校…来れそうにないのでしたら、無理に来なくても大丈夫ですからね？」

ただ、誰かに頼れそうな余裕があればですが、そのときはいつでも私たちに頼っていただいてかまいませんからね？ ひより」

「ゆりさん、大丈夫ですか…？、有珠なんかでよければ、…その…頼ったり愚痴でもわがままでも全然大丈夫ですっ

これはまた有珠のわがままなんですけど…

またいつか、有珠とひよりさんと…それに灯さんとゆりさんと、4人あの教室で笑いたいですわがまま…ごめんなさい」

どう…説明していいのかわからない

…泣きながらも少々混乱していた

涙が止まらなくなった

優しさが嬉しかった

- 本文 -

「ゆりちゃん、返信…できそうにないほど辛いのでしょうか…？」

メール、ゆりちゃんも辛いと思いますので、今日はこれで最後にしようと思います

ただ最後に

私たちはまだ灯ちゃんよりはゆりちゃんには浅い友達の関係かもしれません

ですが、それでも、私たちは確かな仲間ですからね？ ひより

「

「ゆりさん…本当に大丈夫ですか？

朝から、ずっと心配です…

今日、一時間目の授業は生物でした

ゆりさん、覚えてますか？

有珠のことをゆりさんに救っていただいた、あのときの机に座っています

落書きもまだ全然残っているままです

メール…返せそうにないなら、あの机でも…大丈夫ですから今度は有珠ががんばりますから」

「…っ…ひくっ…うう ひより…っ 有珠ちゃん…」

切なくて…もう本当に切なくて

その画面に映るメールの文章を両手で胸の奥いっぱいぎゅっと抱きしめた

（ありがとう… ひより 有珠ちゃん…）

………

………

いつまでも涙が止まらない自分に困っていた

泣いている理由だって自分でもよくわからなくて

もう駄目だった

耐えられなかった

死にそうになっていたんだ

ただ、うれしくくて…切なくて…っ

胸を掻きむしりたくなるくらい本当に切なくて…っ

でも、それでも

この嬉しさだけはごまかせなかった

誰もこの家にいるわけでもないのに、必死に一人…私は声を押し殺してぼろぼろと泣いた

………

………

それから、どのくらいの時間泣いていたのか分からない
やっと涙が治まった頃にはきつと私はひどい顔をしていたんだと思う
でも…それでも

行かなくちゃ…

…いけない場所がある

(…このままじゃ…終われないよ)

私は制服に着替え、この衝動ありったけの力で家から飛び出した

…向かうべき

場所を目指して

第16話

「はあ…っ はあ…っ
」

私は走っていた

真昼の町並みをかきわけて、女子高生が一人、全力疾走で学校へと続く道を走っていた

（いつ以来だろう…こんなに人目を気にせず全力疾走で走ったのは
）
下手をすれば小学生以来かもしれない

涙が溢れ出ていたまぶたに風があたり、走りぐしゃぐしゃになった
髪の毛や首筋に風が通り抜けてゆく

左手に持つ学生カバンを雑に振り、スカートの揺れを気にすること
も忘れて

右手のこぶしの中にはさっきまでのメール画面のまま閉じた携帯を
強く強くにぎりしめていた

「はあ… はあ…」

気がつけば、私は学校の正門の前に立っていた

まだ久しぶりの全力疾走のせいで胸を締め付けるずきずきとした痛み
はあるものの、足を止めるという考えは今の私には思いつかなか
った

ただ前へ前へ

ただ私が私でいれる あの世界へ

確かに信じれる、あの場所へ

ちょうど今の時間は、お昼休みの真っ只中だったのか校庭にも廊下にも教室にも生徒で溢れていた
その生徒をかきわけ私が真っ先に向かおうとした場所はいつもの1年E組の教室ではなかった

真っ先に目指した場所

そう… 4階の隅の古臭い教室

ただの直感だった
でも確かな確信もあった

あそこに行けばきっと皆がいますと

………

息が込み上げ、荒い呼吸で階段を駆け上がり、4階の隅の教室の扉の前へとたどり着く

相変わらずお昼休みだというのにこの階もこの教室もがらんとしていた…

「…ふう」

あらためて呼吸を調え、教室のドアに手をかけた

（みんな…）

そして…

私は踏み出し、扉を開けた

ガラッ…

静かに鈍い音を震わせながらゆっくりと開いた扉
鼻に伝わる独特の匂い

相変わらずの小汚い物が積まれた物置部屋のような空間…

そして、視界を向けたその先には…

………

窓を開け、カーテンが風でふわりとなびき、真っ白い光が教室一面
に降り注ぐその場所

(…つつ)

…いた

そこには二人がいた

驚くこともなく、焦ることもなく、まるで私が来ることがわかって
いたかのように

そしてすぐにその二人の声は私に向かって発せられた

「お帰りなさい ゆりちゃん」

「ゆりさん おかえりなさいですっ
」

………

(ああ……… よかった………)

ホッとした…安心した

それなのにどうしてだろう

さっきまで泣いて泣いてからからにからっぽになった瞳からは、ま

たしても感情が溢れ出しそうになっていた
心の中で深い深い安心の一息をいれて、精一杯の声で二人に向けて
答えた

「ただいま…っ ひより 有珠ちゃんっ」

窓辺に立つひより、そのすぐ横でイスに座っている有珠ちゃん、私
の答えを聞いて、ただ二人はそっと笑顔を向けてくれた

けれど…やはり、灯の姿だけはそこにはどこにも見当たらなかった…
(やっぱり…)

そこからは、またいつものように戻り、いや…いつもと変わらない
三人だった

「ゆりちゃん 髪の毛 大変なことになっていきますよ？」

「あ…うん 走ってたから」

窓に映るボサボサの髪をした私の顔
でもよかった

鏡に映る私は、もう、ちゃんと笑えていたから…

そして、光に照らされたひよりの微笑みはあのメール以上に私に安
心の気持ちを与えてくれた

「ゆりさんっ これから午後の授業は出るんですかー？」

「うーん… どうしようかな…」

正直まだ授業を受けるほどの気力はなかった
授業を受ければ一つ前のからっぽの席をいやでも一時間も見続けな
ければいけない…

それが…今の私には痛いほどきついものなのだから

(灯…)

心の中で呟くように、叫ぶように滲み出たこの世界中たった一人の親友の名前…

「そうですかあ…」

「あ… えっと ごめんね… 有珠ちゃんっ」

せつかく仲直りできたのに、また不器用な自分が表で邪魔をする

「そうですね では それならっ」

ひよりが思いついたように手をポンツっとついた

「…??」

私も有珠ちゃんも何事かと首を傾げる

「それならっ 今日は無断早退してしましましょうっ」

……

……

「「え……っ!?」」

笑顔のままひよりはその表情とは真逆のことを簡単に言っただけ

「な、な、なに言ってるのひより??」

「ですから 三人とも今日はこれで終わりです」

「いやいやっ 笑顔で普通に言っただけじゃないでよっ その前にひよりってそういうキャラじゃないよね？」

「そうですか? 確かにそんなことしたことなく今まで全くありませんでしたが」

「というより 有珠ちゃんのほうだって授業…」

「有珠は…」

「うん」

「有珠も…今日は終わりですっ」

………

「えーっっ」

「有珠ちゃんっ 有珠ちゃんもそういうことするタイプじゃないよねっ？」

「そうですけど… あの教室…にいるくらい ならお二人と一緒にいたいです」

「…あ」

…教室… 有珠ちゃんの痛み…

「うん…ありがとう ひより 有珠ちゃん…」

「友達なんですから 気にしないでください」

「エヘヘー そうですよっ」

友達…

「うん…ありがとう」

少しの罪悪感があったものの、今のこの二人には勝てそうにもなかった

お昼休みが終わるころ、私たち三人は初めて学校から無断で早退した私の場合はまだ学校に来てすらいらないことになっているはずだけど
ひよりと有珠ちゃんはいったん教室からカバンやらを取りに戻って、

私だけ先に正門の前で待っていた

（それにしても）

手を天高く空にかざせば、真つ青な昼下がりの空と陽気が体を温める
9月とはいえ、本当にまだ夏の匂いが残る季節だった

そのまま両手を広げおもいきり、うーんつと伸びをする

（気持ちいいー）

「お待たせしましたーっ」

そんなことを思っている

先に有珠ちゃん

「お待たせしました」

その10秒後にひよりも

…よくよく思えば、こんな昼間から女子高生が三人歩いていたら、
それだけで今ただでさえ警察の街の警備がすごいのに、大丈夫なの
だろうか…

「さて どこに行きましょう」

「あ… えっと 駅前とかはごめん…」

「ゆりさん 大丈夫ですっ 駅前以外にも多分 遊べる場所はある
ますよっ」

私の退いた声をすぐにフォローするように有珠ちゃんが言う

「では コンビニに立ち寄ってもいいでしょうか？」

「コンビニ??」

「はい コンビニです」

「有珠はいいですよー」

「私も大丈夫」

とは言え、学校の前のコンビニに行くのは5分もかからなかった
自動ドアが開き、ひよりは真っ先に本棚に歩いていった

「よかったー まだ一冊残っていました」

ひよりが手にしていた本…

「ジャンプ??」

「はい ジャンプですよ 金曜日だったので もうないと思っていた
たのですが 一冊だけ残っていてよかったです」

「ひよりって意外とこうゆう少年誌とか漫画読むの?」

「少年誌はジャンプだけですが 漫画は全般ですね こういうジャンプ系から萌え系まで」

「そ、そうなんだ…」

前に言つてた同人誌というのは冗談ではなかったらしい…

「とくにジャンプはBL要素の宝庫ですね」

「へ、へえー…」

…端から見れば清楚で真面目そうな少女を、誰が無断早退してBL要素と語りながらジャンプを読んでいたと思うだろうか…

「あれ? 有珠ちゃんは?」

「にゃあにゃあ〜っ」

(あ… いた)

後ろから有珠ちゃんの声が聞こえる

(というか どういう合図なんだろう…)

有珠ちゃんは小さなお菓子棚のところでなせが屈んでいた

「どうしたの有珠ちゃん?」

「これー」

…???

有珠ちゃんが指した方向を見る

「…っ 有珠ちゃんっ!？」

驚いた…っ

なぜなら、有珠ちゃんはその手に入りきらないほどの量のチロルチヨコとチュッパチャップスを箱買いしようとしていたからである

「あ、有珠ちゃんっっ さすがにちよつと買いすぎだと思っよっ
「でも…」

そう言うのと、ふいに有珠ちゃんは自分のカバンを開けた

……

……

もはや私の常識は通用しないのだろうか…

有珠ちゃんが開けたその学生カバンの中には…

お菓子…

お菓子…

ついでに、お菓子…

隅を見ると、やっぱりお菓子…

と思いきや、奥のほうも残念…… お菓子

カバンびっしりにお菓子が入っているっ!?

というか、お菓子しか入っていない!?

「…あ、有珠ちゃん… こ、これ 教科書とかは??」

「ここです」

… あった

本当に隅に現代国語の教科書の、「現」と書かれている本らしきも

のがぎりぎり確認できた

お菓子に埋もれている…

（有珠ちゃんって…）

その幼い見た目と喋り方以上に、さらに子供っぽいところを発見してしまった気がする…

謎が一番多いのは、きっとこの子かも…

…

…

…

そんな昼間からの遊びも、本屋さんに行ったり、CDショップに行ったり、雑貨屋さんに行ったり、あの川沿いのベンチでアイスやお菓子を食べたり

駅前に行けない分、まるで中学生の帰り道のような遊びしかできなかったけれど

でも、それでも…

本当に今日という日が楽しかったっ

（ありがとう ひより 有珠ちゃん）

涙で起きた今日を、幸せな思い出で眠れたことに、ただ二人の友達への感謝と

…唯一の一人の親友への不安を思いながら、今日は眠りについた…

コンビニで見た、抹茶いちごメロンパンだけが…どうしてか、私の心を震わせた…

第17話

- 9月6日 - (土) -

「ウーッ！ ウーッ！」

まだベットの中で眠っている意識の外側でパトカーの嫌なサイレンの音が耳を通過する

……

……

「…ん…っ」

土曜日だっていうのにこんな朝から騒がしい街に響くサイレンの騒音に私は起こされた

「はあ…」

(嫌な目覚めだなあ…)

気分を変えようと、なかばまだ半分寝ている思考で部屋のコンポの電源をつける

直ぐさま何百と繰り返したであろう、いつものBUMPのアルバム曲が流れ始める

意識も起き始め、猫のようにベットからモゾモゾと起き、部屋のカーテンをシャーッとおもいつき開くと…

「雨…」

窓から広がる景色は今週始めての雨空だった
しんと降り注ぐ雨粒、灰色の重い低い空に見えているだけでじとじと身体に張り付くような嫌な湿気を感じる

（テンション上がらないなあ…）

そんなことを思いながら真っ白なブラウスに腕を通し制服に着替え始める

私の学校は一応私立のため、土曜日にも午前中だけ授業がある
早々と制服に着替え終え、一階に下りた

まさにそのときだったっ

ピンポンッ！ と玄関のインターホンが鳴った

（…？？ 誰だろう こんな朝から）

「はいっ」

パタパタと玄関へ小走りで向かう

朝からのいきなりの来客に驚いたものの、またどうせ新聞やセールスマンのものだと思い、なんらためらいもなく私は玄関のドアを開けた

…それが問題だった

「あ 朝からすいません 私たちこういうもので」

………

（…っ！！？）

（警察…手帳…っ！）

焦った…

狂い震えるほどまでに焦った…

扉一枚開けた私の目の前には警察の制服を着た二人組の警察官が私を見下ろし立っていた、その手に警察手帳を私に差し出して見せながら…

「あ…っ…っ」

私は捕まるのか、事情聴取でもされるのか、はたまた家宅搜索でもされてしまうのか…

頭の中で自分の秘密に比例するように不安と痛みが音を立てて押し寄せてきた

小刻みに震える私をよそに目の前の警察官は話を続ける

「今週 その駅前で起きた通り魔事件の目撃情報を聞き込みで調査してまして」

私に話しかけた二人組の前の背の高い若い警察官は私にそう言ったもう一人後ろに明らかに前の若い警察官より先輩そうなおじさんの警察官のように見える

「……あ…あ」

あれだけパトカーに恐怖を感じ、駅前にすら行けないほどまでに募りに募った…今の自分と警察が交わる不安感…

それが今、まさに何の気無しに私の目の前で起きている

「……………」

「……?」

あまりに焦っているような挙動不審な私の仕草に向こうも気付いたのだろうか

探るような目線で警察官は私のことを見ている

「……えっと……」

「…あ 急にごめんね ほかに家族の人とかいるかな？」

私が驚いていると解釈したのだろうか…

警察官はそう言って私を安心させるように小さな笑顔を向けた

「あの… 今 私しか家にいないんです…」

「そっか 君は…中学生かな？」

「あ…えっと 高一です」

いまだ緊迫した緊張感が胸を締め付ける

私の一言で私は簡単に犯人にでもなれてしまうのだから

「じゃあ　いくつか少しだけ質問させてね」

「……はい」

そう言つてその二人組の警察官はしばらく私に数点質問をした

・二回の通り魔事件の起きたときの同時刻の私の行動

・身の回りに条件に合いそうな人はいないか

時間にしてきつと5分弱

けれど、本気で嘘を隠し通し続けた5分…

「ありがとうございます」

警察官は、最後にそう言つとまた小さな微笑みと小さな一礼をし、
去つていった

警察官が歸つて扉を閉じたその瞬間、私は緊張の糸が切れたのか、
崩れるようにドサツとその場の玄関でへたれこんでしまった

しかし…これほどまでに警察は通り魔を捕まえたいという、一つの
核心の情報、だけはわかった

「はあ…はあ…」

どつと重い痛みをなんとか越えた疲労はあつたももの普段通り学校
への準備をして、私はいつものように7時45分
家を出た

その間、いまだ付きまとう危機感を消し去ろうと毎朝聞いている i
Pod の音量をいつもより少しあげてみたりみる

それなのに、傘から滴る水玉がやたらと私の気分を下げさせるのだ
つた…

（私は無関係つてちゃんと向こうに思われたかな）

もしさっきの警察官に私の挙動不審な姿が怪しいと判断されていた
ら…

ネガティブな思いのまま私は学校に着いた

しかし、私にはもう一つネガティブになってしまふ問題があった

(…灯…)

2階の1年Eの教室の扉の前で立ち止ってしまふ

(…灯…)

(今日は、もう…まだ 来てないのかな)

ガラツ…っ

………

………

(……っ)

目を閉じてどれだけの時間待ってみても、決して誰も私に飛びついてはこなかった

「灯…」

目をゆっくり開けて窓際の私の席の前を見る

案の定、そこには…誰も座ってなどいない、からっぽだった

「…っ…う…」

(会いたいよ…灯)

(抱きしめて…ほしいよ…灯…)

席に一人座って思うことは前の席の灯のことばかり、今の脆弱した私を、毎朝当たり前と思うほど感じたその柔らかい笑顔とその優しく強い腕でぎゅっと抱きしめてほしかった…

ただそれだけなのに…

………

………

（有珠ちゃんなら、もう学校に来てるかな）

一人ぼっちの半端でない寂しさが辛すぎて、生徒がまだちらほらと
しかいない朝の教室から逃げるように出て、私は有珠ちゃんのいる
B組の教室へと向かった

B組の教室もE組とかわらず生徒はまだほとんどいない

（…まだ登校していないのかなあ）

教室全体を見渡しても有珠ちゃんの姿は見当たらなかった

「はあ…」

諦めてE組に帰ろうと視界を横に向けたときだった

前の黒板の横に置いてあるごみ箱をあさるような人影が…

…???

…

（…!!?）

「あ 有珠…ちゃん???」

「ぶあつつ ゆひはんっ おはおうほはひまふっ」

「喋りづらいならそのくわえてるチュッパチャップス一回とろうね
っ?」

「…こくっこくっ」

そう頷くと有珠ちゃんは名残おしそうにくわえていたチャップチャ
ップスをとった

「では あらためてっ ゆりさんっ おはようございます」

「えっと おはよう…」

「はいっ」

……

「…いやいやっ　というか　どうしてこんな朝からごみ箱なんかあさってるのっ!？」

「あ　これですか？　これは昨日　机に中に置いてきた数学のノートが朝来たらなくなっていたので探していたのですっ」

「あ……えつと……」

やっぱりまだ続いていたんだ、有珠ちゃんに対するいじめ…

それなのに、ノートをごみ箱に捨てられて…どうしてこの子はこんなに純粋な笑顔でいられるのだろう

どうして…私はいれないんだろう

「えつと…　その…ごめんね」

「謝らないでくださいっ　有珠は大丈夫ですよー」

「その…それでノートは見つかったの？」

「はいっ　見てくださいっ　ごみ箱の中で発見しました」

そう言っつて、有珠ちゃんはうれしそうにぐいっつと両手を突き出してそのノートを見せてくれた

「そう　よかった…のかな？」

いじめられていてこうなっつたと思うと…たやすくよかったとも思えなかった

「見つかったので　よかったことにしておきましょう」

やっぱりこんなに子供みたいに華奢でちっちゃくて、なにより銀色の髪に青い瞳なのが、いじめられる原因なのだろうか、単なる転校生ならここまではされないはず

「そういえば　今更なのかもしれないけど…」

「はい　なんでしょうか？」

「有珠ちゃんって髪の色とか瞳の色とか身体の白さとか絶対日本人じゃないと思うんだけど　もし嫌じゃなければ　聞いてもいい？」

「そんなことですか 全然大丈夫ですよ 有珠はポーランド系のクォーターの血を持っているのですよ」

「へえ ポーランドなんだ」

「ポーランド、どこだっけ……」

「はい だから地毛も銀色なのです 正確にはプラチナブロンドって言いらしいんですけど」

そう言う和有珠ちゃんはその綺麗な銀色のショートボブの髪を自分でくしゃつと触る

……

「ねえ……撫でてもいい？」

「撫でる……ですか……」

今のネガティブな自分には、なぜだろうか
有珠ちゃんの髪が愛おしかった

「やつぱり……だめ かなあ？」

「そのう……どうぞ ゆりさん……」

少し照れたような反応をして、有珠ちゃんは私が撫でやすいように頭を差し出してくれた

優しくさーつ和有珠ちゃんの柔らかい髪を撫でる

（うわ…… 気持ちいい）

「ほわぁ……」

直ぐさま有珠ちゃんがハムスターのように縮こまり反応する、目が
気持ちよさそうにうつとりとしている

「ふふっ」

今度は少し指を髪に絡ませながら撫でてあげる

「にやう／＼」

（あのひよりも撫でられる理由がわかった気がする）

「いい子いい子」

軽く冗談のノリで言ってみる

「…ふにゃあ…／＼」

「ふふっ 可愛いっ」

（どうしよう 病み付きになりそう）

いつも撫でられる側だけど、灯やひよりの撫でる側の気持ちがとてもよくわかった

「…ありがとう 有珠ちゃん」

「…ふえ？」

「あ ううん …なんでもない」

有珠ちゃんのおかげで少しだけ気持ちが晴れた気がした

それから教室に戻り、いつものように授業を受け、いつものように空ばかり眺め、あつという間に4時間目の授業も終わった
学校からは部活がある生徒以外の子はほとんど帰っていく

しかし、私たちは相変わらずまた‘あの教室’に来ていた

そう…4階の隅の古臭い教室

三人でまったくだらない意味のないようなことを話したり

今日の空は雨模様で窓を開けられないため、ひよりも珍しくイスに座り漫画を読んでいた、有珠ちゃんは幸せそうに足をぶらぶらさせながらお菓子を食べ、私はただぼーっとしている

誰も愚痴や自分の痛みのことは口にしない

そんなとき

お昼ご飯も食べ終わったところだった

ふと私たちのいるこの教室の扉の窓から

一瞬だけ窓の向こうに人影が見えた

柔らかな癖っ毛に秋っぽいショートボブの髪…

しかしそれは本当に一瞬で…、でも毎日感じるある一人の雰囲気のものでもあつて

絶対に間違えるわけない…

…間違いない

だってそれは…

確かに灯だったのだから…

第18話

「灯……っ!？」

一瞬だった

本当に一瞬だった

「あ、灯っ……!!」

「……っ!?!？」

扉の窓を通して一瞬目の合った灯は

私がそれを灯だと確信したとき、教室には雨が降り続く外の音とともにダンッダンッダンッと灯が階段を物凄いスピードで駆け降りる足音だけが響いていた

……

「ゆ、ゆりさんっ! 今のっ」

「追ってあげなくていいんでしょうか？」

有珠ちゃんやひよりもたった一瞬の灯の扉ごしの眼差しに気付いていた

「……あ……」

……

……

こんな場面が前にもあった気がする

灯に私の秘密がばれて、灯がこの教室から走り去って私はただなにも出来ずに呆然と立ち尽くして……逃げて

「ゆりさんっ 早くしないとっ」

…あの日から私は

何度も泣いた、何度も灯を想った

それなのに…

一度泣いただけじゃだめなのかな…っ？

私じゃ私は変えられないのかな…っ？

「ゆりさんっ！！」

（有珠ちゃん…ごめん）

有珠ちゃんの声の先には…、またどうしようもなく、あの日のようにただ立ち尽くし俯いているヘタレな自分がいた

（…っ…っ）

（灯に逢いたい…逢いたいの…っ）

恐怖や不安が私の頭にフィルターを、足にストッパーをかける
もし追い付いて今度こそ…だめだったら、本当に自分が壊れてしま
いそうで…

……

「あっ！ ゆりさんっ あれっ…灯さんが」

（…ビクッ）

窓際にいた有珠ちゃんが校庭のほうを見て指差す
私もその指の差す方向を横目で見る

（……！？ 灯…っ！？）

そこには、朝から続く雨に打たれながら、ぐしゃぐしゃの校庭の泥
と水を跳ねながら自転車置き場へと走って向かう酷い灯の後ろ姿が
あった

「……灯…」

目を締め付けるそのぐしゃぐしゃな灯の姿が私の胸を叩く…

……
……
……
やっぱりだめだ…私じゃだめなんだよ…

灯…

ごめんね…

……

……

……

「- また 逃げるんですか？ -」

(…つつ…!!)

私が諦めかけたときだった…

不意打ちの如く、後ろからひよりの声が聞こえた
腐りかけていた私はその言葉に慌ててぱつと振り向いた
その瞬間

私は言葉を失った

なぜなら

ひよりの右手には

私に見せ付けるようにかざした携帯電話

しかしその画面にはつきりと表示されていた送信済メールボックス
の画面

……送信済メール

9 / 6 雪村 灯
9 / 6 雪村 灯
9 / 6 雪村 灯

……

「あ……それ……」

そこには、灯宛ての今日の日付の送信済メールが何通も……何通も表示されていた

まるでそれは、昨日憂鬱な私が泣き崩れるほどに助けられた‘あのメール’たちのようだった

私が動揺していると、私の近くにいた有珠ちゃんも懷から静かにもぞもぞとなにかを取り出し始めた

カチツと一回の開閉音

小さなボタンを押す音

有珠ちゃんの携帯電話

そして、有珠ちゃんもひよりのように私に携帯の画面を見せた
送信済ボックス

9 / 6 雪村 灯

9 / 6 雪村 灯

9 / 6 雪村 灯

(……っ！！)

「ひより……有珠ちゃん……」

「ゆりさんっ」

私がア然な表情をしていると有珠ちゃんが呟くように話し出した

「有珠たちは 昨日みたいにゆりさんがまた学校に来れるようには
いくらでも努力しますっ、でも……灯さんだけをまた元気にさせてあ

げられることはできないです」

「……………」

「それができるのはたぶん世界中たった一人、ゆりさんにしかできませんっ」

「……………」

「残念ですがゆりちゃん 私たちにできるのはここまでです」
有珠ちゃんに続けてひよりが喋った

ああ、やっぱり…

やっぱりこの二人には勝てそうにない

昨日の朝の二人からのメールも、私がそれによって学校に来ることも、そしてこの教室に真っ先に来て一緒に無断早退して私を元氣付けることも…

全部、二人の優しい優しい作戦だったんだ

そして今日…同じように灯にもメールを送ってあげて、この状況まで私たちを立ち直らせて

数え切れない気付かない優しさに、気付かないうちに助けられてきた

何度も

何度も

そして今回も

「…ひより 有珠ちゃん」

「ゆりさんっ 見てくださいっ 雨…あがりましたよっ」

しきりに朝から降り続いていた雨空の音が止み、背中に夏の光の陽

気をふと感じる

あんなに降り続いていた灰色の雨は、夏の陽気に負けるように押しのけられ、雨上がりの夏の空に身体が夏の日差しにさらされてゆく「ゆりちゃんには話したと思いますが私のこのカーディガンの秘密」

「…うん」

「私は… 私も去年 今のゆりちゃんのような状況になりました」

「しかし私はあのと走り出すことができませんでした」

「それは一年経った今でさえも はっきりとした後悔と挫折という気持ちで残っています」

「…うん」

「あのととき もし勇気を出してあの人元まで走り出せていた自分がいたなら…」

(……)

そう言うときひよりは悲しげな表情をしてカーディガンの裾をぎゅつとにぎりしめる…

ひよりの痛み

すれ違って…

もう一度、大切な人を迎えに行くこともできず…

「ですが ゆりちゃん？」

「…はい」

「ゆりちゃんは私とは違います」

「私たちなんかより 誰より先にゆりちゃんが向かうべき場所があるはずですよ」

「…うん」

「もう一度 言います」

「…私たちにできるのはここまでです」

「あとはゆりちゃん自身の判断です」

(……………)

こんな…

こんなにまで二人にされちゃったら…
もう、選択肢は一つしかないじゃね

……………

……………

「…ひより…有珠ちゃん 本当にありがとう…」

「はい」

「いえいえですっ」

「ちょっと…」

「…行ってくるねっ」

「はい 行ってらっしゃい」

「がんばってくださいですっ」

「うん…っ！」

バンツッ!!

そう伝えた瞬間っ、この教室の古びた扉を勢いよく跳ね開ける
そしてそのすぐ横にある下の階へと繋がる階段へと直ぐさま走り出す
足が廊下へと踏み出し、ありったけの力を込めて踏み出したこの一
歩目

止めたくない今のこの速度で、最上階の階段を最大限のスピードで
走り抜ける

スカートがフワリと揺れ、髪がなびき、階段の段差を飛び越えて舞い上がる

窓からは完全に雨の止んだ空からの斜陽が降り注ぐ

（今だけでいいから…）

この手よ、今は震えないで…っ

この足よ、ちゃんと私を支えて…っ

階段はダンッダンッという音を響かせながら、蹴り返し、風の如く身体を前へ前へ振り飛ばす

「はあ…っ はあ…っ」

時間はあの日から止まったままなんだ…っ

あの日、ここで遠ざかって消えていった親友の背中…

灯と語ったくだらないあれこれや抱きしめて、私は今、灯と出会えた幸せを噛み締めながら、こんなにもこの階段を駆け抜けている…っ！

「はあ…っ はあ…っ」

階段をありえないスピードで一気に下りきり

一階の生徒玄関で一度、血が巡りドクンッドクンッと激しく脈を打つ心臓の鼓動を落ち着かせる

「すう… はあ…っ」

目一杯の背伸びをして深呼吸をする

上履きを脱ぎ、ロッカーから入れ代わり出したローファーに2秒ではきかえる

そこでいったん私はその場で小さく俯きしゃがみ込む

両目を閉じて左胸の上にそっと手を置く…

（ここまで来たら…もう戻れないよね）

みっともない格好だけれど、こうして立ち止まっているのは、私が

次のステップに私なりに進むための静かな前触れなのだから

左胸の奥が高鳴る感覚がわかる

不安が脈を打つ…

しかし、ゆっくりと両目を開き、静かに先立つ衝動に身を任せ始める
「ふ…う すう…」

次の瞬間っ！！

そのままのしゃがみ込んだままの体勢

そう…まるでクラウチングスタートのような格好で
助走もつけず、ザッと思いきって地面を蹴り飛ばす

今 行くから…っ

待ってて 灯っ！

第19話

一つの大切な決意を胸に

私は毎日通うこの生徒玄関を力強く踏み出した

校庭に出た瞬間、頭上に広大に広がる邪魔するものは何もない雨上がりの夏空がこんなにも眩しく私の身体を包むこむ

（どうしてだろう）

子供のころに無くした…忘れたようなワクワクした懐かしいような優しい気持ちがじわっと胸いっぱい広がってゆく

（…不思議）

5分前まであんなに教室では、あの日食い違えてしまった親友を不安にも追いかけようとしていたはずなのに

不思議と今はなにも怖くない

不思議と今は

この空を見ると心なしか今日中に答えが出そうなの

なんだか、そんな気がして一人で笑みがこぼれそうになっている自分がいる

残暑溢れる景色

この空いっぱい広がる澄んだ青い空も、清々しく眩しいキラキラしたオレンジ色の太陽も、空に舞うもくもくしたわたあめみたいな入道曇も

そしてこの雨上がり独特の夏の匂いも

全部が全部、私の味方をしてくれているようで

真っ白なブラウスの襟を夏のそよ風に乗せて眩しく光りが横切って

ゆく

ほんのちよつとだけ立ち止まり、もう一度だけこの懐かしい匂いを
息いっぱい吸い込んで深呼吸をする

そして

また私は慌ただしく走り出すっ

ガタガタのちぐはぐな慣れない足音にたった一つの想いだけをこの
胸に抱きしめて…

私は今、疲れることも忘れて夢中でこの夏風に吹かれている

朝から続いた雨に校庭の土はぐしゃぐしゃにぬかるみ

しかしそれでも、ローファーにへばり付く泥など気にすることなく、
大きな水溜まりは勢いよく水しぶきを跳ね上げて私はひた走っていた

「はあ…っ はあ…っ」

ふと見上げた白昼の空に浮かぶ気まぐれな雲に、おもしろいくらい
に君の顔が浮かぶよ

校庭の回りを見渡せば

隅では雨の雫をまとった雑草が日に照らされて水玉を宝石のように
小さくキラキラと輝かせ

陰ろつの中で花は涼み、学校の目の前の小さなひまわり畑はきれいに
初々しい黄色に咲き誇る

そんな風景を感じながら、私は校門の前に着いた

「はあ…っ はあ…っ」

全力疾走の連続でさすがに息が苦しい…

足元からはアスファルトが太陽の日光を私に照り返し、ビルの間か
らは風の声が吹き抜ける

(…どっちだろう)

私は校庭の前で足踏みをしていた

右か… 左か…

きよどきよどしながらも…

それは、ただの勘だった

私はただ何も考えることなく、やみくもに左の道へと踏み出した
…ただ単に、右の道が自分の家と続く帰り道だったからなのかもしれない…

このまま帰る道なんなんてないっ、そう思った反動なのだろうか
私は左のほうへと思いきって踏み出した

真昼のなに一つ変わらない街で、私は身体から光る汗を弾き、喉を
震わせながら

ただ風に全ての答えを委ねて走ってゆく

（灯の行きそうな場所…っ）

そこからはしらみ潰しだった

灯の行きそうなお店、灯の行きそうな所、好きそうな場所、
息をきらしながら駅前周辺以外の灯の行きそうな場所はほとんど回
った

…けれど

…

…

どれだけ走ってみても

大切な親友の姿など、どこにも見当たらなかった

「はあ…っ はあ…っっ
」

髪も汗だくになって町中走った

（もう日が暮れる…）

昼下がりに学校を出て、空はもうすっかり茜色に染まり、暮れ始めた静かな自然と騒がしい町並み、音の絶えない駅前、それを見渡す高い丘、二つのモノが確かに共存する私たちの街
聖蹟桜ヶ丘は、また今日という日を終わろうとしていた

（もしかしたら…家にいるのかなあ…）

その可能性は考えなくなかった…

信号待ちの間、喉もカラカラになり、少しだけ膝に手をついて足を休める

（どこにいるのかなあ… 灯…っ）

悔しくて、焦って、辛くて涙がぼろぼろ溢れるそうになる目を必死にごしごし擦って、唇を噛んでごまかして

また強がって必死に踏ん張ろうとする

もうボロボロな身体なくせに、誰より泣き虫なくせに、

また精一杯灯を探そうとしている

信号が青になっても立ち止まったまま、頭の隅々まで意識を集中してもう一度考える

灯の…いそうな場所

今の灯が行きたいと思う場所

……

わかるはず…ずっと一緒に笑ってきた私なら…っ

それが、有珠ちゃんやひよりが私に託したモノなのだから

(……………考える、私っ)

………
…

(……！)

頭に一瞬光がかかる

輝く夕焼けの光がさす方向にそってゆっくり目をやる

(あつた……っ！)

灯が行くかもしれない場所がまだ一つだけあつた

(どうして真っ先に気がつかなかったんだろう)

………

(もう…… あそこしかない)

思い当たる最後の場所に祈りをかけ、走るなど全く慣れていないこの華奢な細い足にまたちぐはぐな力を入れて私は走り始める

… 駅前へと続く並木道

「はあ……っ はあ……っ」

並木道の木漏れ日が眩しい

高一なりの仲間と、身体と、経験で

弱々しい心と震える唇を食いしばりながら、逢いたい一心で一歩一歩、しっかりと前へ進んでゆく

この行為に……

この‘弱者の反撃’に

間違えた君との旅路に、最後の最後に正しさを祈りながら

ただ一つ

君との再会を祈りながら

「はあ…っ はあ…っ」

雑踏の人並みをかきわけて、駅まで続く並木道を横道へと曲がり、夕日に染まる太陽を背に感じながら、胸の痛みを必死に堪えて最終の力を振り絞って小道を走り抜けた

バツとその道を抜けた瞬間！

「はあ…っ はあ…っ」

ここは

灯との思い出がたくさんある場所
何度も一緒に歩いた

そう…あの川沿いの道

そして、いつもの私たちが座っているベンチのある場所まで疲れきった鈍い足で歩く

すると

すでにそこには誰かが座っていた

…ドクンッ

不意に心臓が脈を打つ

きつと、この何日間、ずっとこのときを待ち焦がれていたんだと思う

夕日に照らされたその後ろ姿

栗色のショートボブ

風にふわふわとなびく柔らかいくせつ毛

…秋の空が似合う少女

近くには漕いできたであろう自転車

「やっと見つけたよ…」

「灯…」

第20話

「やっと見つけたよ 灯」

「!?!?…ビクッ…ッ」

日も暮れかけ、辺りには淋しげなひぐらしの音色が鳴きだしたころ
私がこの川沿いの古びた小さなベンチに座っていた親友へと名前を
呼んだとき、灯は振り向かないままピクリと反応を示した

「探したよ…灯」

「あ…あ… ゆ…り…?」

「……灯?」

…驚いた

そこにはいつもの優しい明るい灯などいなかった
どんよりとした重い背中、雨の降る中を走ったからだろうか
制服は生乾きでしおしおになり、髪がぼさぼさに乱れ、足も泥だら
けになっていた…

そして震える弱々しい声

ザッ…

私が灯の顔を確認しようと前へ回り込もうとした

そのときだった

「っ! み…見ないでっ…!」

「…っ!?!?」

小刻みに震えた声で灯は必死に自分の顔を手で隠した

「あ…えつと ごめん…っ」

「…っ…あ…ヒクッ…」

俯き涙をすする声と震える喉の呼吸

（灯…そんなにたくさん泣いてたのかなあ…）

きつと灯のことだから、普段は陽気な子だからこそ、今の自分を私には見せたくないはず

きつと今の灯はそう思っている…

だから私は灯の顔を見ないまま、おもむろに静かに灯の座っているベンチの横にそっと座った

太陽が遠い西の空に沈むころ、私たちは長い時間止まったままお互い背中合わせでベンチに座っていた

長い沈黙の間、川沿いの道には自転車の学生や笑顔で向かい合うカップルが何事もなく通り過ぎてゆく

日も消えかける頭上の空には星が空を彩り始め、月が真上で街を夜へと進め始めたころ

………

「…どうして…」

「…？」

新たに口を開いたのは灯のほうからだった

「…どうして…来たの…？」

灯のその小さな言葉は本当に重く悲しげだった

（………）

「灯…ごめんね」

「？…どうして…ゆりが謝るの？」

…言葉に詰まる

「だって…」

「だって私は灯にだけ大事な秘密　ずっと隠し続けてて…」

「ずっと…ずっと灯のこと騙し続けてて…」

まぐろのことも、ずっと知らない振りをして気遣ってくれた体温のことも

ずっと…、それなのに灯は側にいてくれたのに

（なのに私は　嘘つきで弱虫で臆病者で…　っ）

「本当にごめん…灯　本当にごめんなさい…」

背中合わせで灯には見えるはずもないのに、私は座ったまま深々と頭を下げて心の底から謝罪をした

許してもらおうなんて思っていない

それだけのことを…私は灯にしまったのだから

………

………

「…知ってたよ？　始めから…」

「…！？」

まさしく不意打ちだった

灯の顔は見えない

けれど

けれどもなぜだかその声は灯が微笑んでくれているかのように優しくかった

叩かれも怒鳴られてもしまう覚悟だったのに、灯ははまだ泣きながら

らのぐずぐずの声であっさりと答えた

「あたしが逃げ出したのは…あのとき　あたしがどうしようなく苦しかったから…」

「…うん」

「始めから…『そんな身体』なゆりだったからこそあたしはひよりをゆりに紹介したし」

（そう…だったんだ）

…やっぱりだ、灯の優しさにはいつも自分が気がつかないうちに救われてしまう

「…でもさ　本当はどこかで信じてたのかも　ゆりは弱い子だからあたしが側にいないとだめなんだって…」

（……）

「でも　全然違った…」

「ゆりはひよりや有珠とどんどん仲良くなっていった」

「それがたとえたった一週間でも　私にはそれがなにより辛かった…」

「ひよりを紹介したのはあたし　…でも　ゆりがひよりと話しているときはどうしようもなく苦しかった…」

「苦しくて…っ　辛かった　弱いのはゆりなんかじゃなくてあたしのほうだった…」

「……………」

「…だってこんな理不尽な私は…ゆりが側にいないと笑うこともできなくて…」

「あたしはずっと…ずっと…ゆりのことが、大好き、だったから…」

「…えっと…それって」

「大好きだった」

灯が呟いたその言葉には、なぜだろうか

この状況だったからなのか

普通ならこれは当然、友としての好き、と解釈するはずだと思うけれど、今の私にはこの言葉は不思議と単なる友へと好意ではなく、異性に対する好意に似たようなもののように感じた

灯はそのまま独り言のように小さな声で話しを続けた

「だから あの日… 逃げ出しちゃったとき ゆりがあたしに秘密のことを隠してたことじゃなくて なによりゆりがあたしじゃなくて、ひよりにだけ、秘密を打ち明けてたことが本当に自分自身の中でショックだった…」

「ごめん… 灯」

もう謝る以外の言葉が見つからなかった

「ゆりに友達が増えてうれしかったよ でもそれ以上に… あたしはゆりを独り占めしたくて ゆりに嫉妬してた…」

「だから…あるとき たまらず逃げ出した」

「……………」

灯の本心を知ったとき、今までの灯に対する愚かな自分の振る舞いに酷く絶望に近い後悔をした

ひよりの痛み…紺色のカーディガン

有珠ちゃんの痛み…現在もなお続けている、いじめ

私の痛み…通り魔と同じこの身体、そしてまぐろ

灯だけは私たち三人とは違うとどこかで確信していた
いつも笑顔で、いつも優しく、いつものほんとしていて

しかし…どうだろう

灯が語ったこれら全てが灯の優しさでもある隠れた優しさの一つだったとして

痛みの真実を知ったとき、私の灯に対する感情がどれだけ浅はかな
他人事の考えだったか…

灯の痛み…

それはまさしく、私だったのだから、

「本当に…笑えちゃうくらい弱いよね…あたし」

………

笑える…わけない

笑えるわけないよ…っ

私はその瞬間、今まで一緒に過ごしてきたたくさんの優しい灯が頭
を駆け巡った

毎朝私に抱き着いてくる灯、授業中幸せそうに居眠りをする灯、嬉
しそうに次々と話をする灯、お昼ご飯のとき隙をついていつも私
のパンを食べちゃう灯

…私のことをいつもどこかで助けてくれる灯、私のことを大好きっ
て言ってくれた灯…

…それなのに…っ

それなのに…っ、今は私のせいでぼろぼろになっている灯…っ

初めて知った灯の想いと今まで当たり前のように側にいてくれた灯の柔らかい笑顔を思い出すだけで
言葉より先に滲み出るように涙が溢れ出してきた

灯が今日までどんな思いで過ごしてきたか…

そう思うともう堪らずいろんな気持ちが溢れてきた、さっきまで堪えていた涙の滴がとめどなく大粒になって頬をつたってぼろぼろと落ちてくる

「あつ…う…うつ…」

「…えっと ゆり？」

背中合わせで横に座っている灯から声がする

…私はきつと今、灯以上にひどく情けない顔をしていると思う
いきなり泣き出すなんて、こんな私に灯はきつと困っている、戸惑っている

「ごめん灯… 灯がそんな気持ちでいたなんて私考えもしなかった…っ」

「ずっと…本当に本当にごめんなさい…っ」

涙をすすり泣きながら、喉の奥に突き刺さる灯の想いで心が粉々になりそうだった

「ごめん灯…いきなり泣きだしたりなんかして…っ 気持ち…悪いよね…っ」

（止まれ…っ 止まってよ…涙っ）

（もうこれ以上、灯に嫌われたくないのに…っ）

体育座りの格好で俯き、必死に溢れる涙を止めようと声を押し殺し、震える唇を噛んで、滴が止まらない瞳を固くぎゅっと閉じた

そのときだった

ザッ…

下の砂利石を踏む足音

なんだろうと思った、その瞬間！

不意にふと、前から私を包みこむ温かい感覚を覚えた
優しい匂い、私のいつも側にいてくれる安心する匂い

（ビクッ……っ）

急なことで慌てて身体を引こうとする

しかし、それが何なのかすぐに気付いた

灯が…

灯が私にもたれかかってくるまでにぎゅうつと細い腕で強く強く私のことをぎゅっと抱きしめてくれていたのだった

…30度の冷たい身体が愛情に満ちた温もりに包まれてゆく

堪らず閉じた瞳を開けると

そこには

酷くくしゃくしゃな泣き顔で、充血した優しい瞳で精一杯の笑顔を
作ろうとしている灯がいた

それは、今日初めて灯の顔を目にした瞬間だった

(…灯…)

そしてそつと灯の唇から声が発つせられた

「気持ち悪くなんか…ないよ？　ありがとう　ゆり…」

「　大好きだよ、」

「…うう…」

もう限界だった…

募りに募った感情がとめどなく溢れ出してきて

何度もバラバラになった心が誰より何より優しい温もりで守られていく

溢れ出す涙をこらえても、抑えきれないこの気持ちが私の瞳から光る滴として降り注いでゆく

「ぐすつ…う…うああ…　　灯い…」

何日ぶりだろう、こうして灯に抱きしめてもらえるのは

そのまま私は灯の温もりの中で泣きじゃくった

幼い子供のように安心して灯の胸に身体を預け、甘えるように私からもぎゅつと灯の背中に手を回した

(はぁっ……灯の匂い　落ち着く…)

…

…

そのまま、私と灯は少しだけその格好でいた

会話もなく何の動作もいらなかった

だつて…

だって二人はまたこうして本当の意味の再会をすることができたのだから

「あのね 灯… たぶん私も灯のこと」

「…だいすきい だよ…」

第21話

（今 何時頃だろう）

私と灯は静かにベンチに座っていた

辺りには街灯も点き、背後には賑やかな駅前之光が感じられ、日中はまだまだ夏の暑さが続いているのに夜になると気持ちのいい夜風が髪をなびかせてゆく

頭上には雲一つない夏の澄んだ星空が広がってゆく

地上のからっぽでぐちゃぐちゃな街とは違い、今日も空は、言うならばまるで、きらびやかにちりばめたビーズのような、とにかく本当に綺麗な星空が私たちの上には広がっている

空を見ていて、ふと横目で視線を左に向ければ、同じように空を眺めている親友の姿があった

灯の視線は頭上に広がるこの綺麗な蒼い空に吸い込まれるようにそっと注がれている

お互いは同じようにただただ夜空を見上げているだけ

ただいつもと違うのは

灯の右の手の平がそつと私の左の手に添えられていることだけ
そして、いつもよりちょこつとだけお互いの距離が近いだけ

ただそれだけが、いつもとはちょっとだけ違う…

けれどなんだろう、それが今の私には夏の季節のワクワクするような、でもどこかそつとじつとしていたような

なんだか、そんな不思議な気持ちに夜風とともに胸をじんわりとさ

せていた

しばらく空を眺めていて、ふと灯が小さく口を開いた

「…この宇宙の中であたしたちみたいな孤独や苦痛や悩みや涙にはどれくらいの価値があるんだろうね」

「うん」

この未知の宇宙の何億光年と続いた先には、私たちのように孤独を感じ空を想う誰かや

私たちを感じてくれる誰かが同じようにこの空を眺めているのだろうか…

私がかもし今 内に秘めている痛みを叫んだのなら、何億光年と超えたその救難信号を、そこにいる誰かは拾ってくれるのだろうか…

お互い視線は空に向けたまま話しを続けた

「ねえ ゆり？」

「…なに？」

「星空って綺麗だけど…なんか切ないよね… うまく言葉にはできないんだけど…」

「うん なんとなく灯の言いたいこと わかるよ」

「…でもさ」

「??？」

「あたしたちの生きる地球には万有引力ってのがあるでしょ？」

「えっと… いきなりなんでそんな科学的なこと？」

いつもふわふわな灯がいきなりそんなものを話しに出したのには少しだけ驚いた

「私はこう思うんだよね… どうして神様は地球を作ったときにそんなめんどくさいものも一緒に作ったのかなーって」

いきなりの灯の難しい質問に私は首を傾げた

「うーん… 天文学者じゃないし科学者でもないし… 灯はどうして??」

「あたしは それはきつと たぶん… この広い狭い地球の中で誰一人… 独りぼっちで悲しまないように、すべての物体がお互いを引き合うような力なんかを神様は作ってくれたのかなって思うんだよね」

「この世界で誰一人 独りぼっちで悲しまないように」

それはまさしく灯らしい考え方だった

「ちよつと… くさかったかもねっつ」

「ううん 私はその考え方好きだよ」

「なははっ ありがとうさー」

………

それから一変、灯は声のトーンを急に变えて独り言のように呟いた
「…でも本当にいつか 心の底からこの空を綺麗だなんて、生きててよかったって、そんなふうに思えるようになっていたいな…」

「…うん そうだね」

………

………

穏やかな夜風と重ねられた灯の手の平から伝わる温もりだけが私たちの時間の中を流れていた

「そつえばなんだけどさ…」

「…ん？」

「さつき… その…ゆりに好きだって言っただじゃん？」

「うん」

「あー…で、えっと…」

「…??」

お互い視線は相変わらず夜空に向いたまま
けれど、どことなく急に不思議な空気が流れ始める

……

「ゆり？」

「なに？」

「あ…これ聞いても気持ち悪いとか思わない…？」

「内容によるけど灯ならたぶん大丈夫」

「……本当に？」

「うん」

「…じゃあ…」

（なんだろう）

目で見ずとも隣で灯が珍しくそわそわしているのがわかる

……

長い長いための後に灯が口を開いた

……

「ゆりごめん あたしね… 実は夏休み前からずっと…好きな人が
いるんだ…」

（…!!?）

灯は悲しそうな声でそう呟いた…

「…そう…なんだ」
「…うん」

それほど驚きはしなかった、それよりもショックな気持ちのほうが大きかったから

やっぱり私にさっき言った大好きは友達としての好きだったのだと…
そして、灯に男子との接点があったことが…なぜか私の胸を苦しめたけれど親友として大切な灯の恋愛相談に乗ってあげられずにはいられなかった

「灯の…その好きな人？はどんな人なの？」

「その人はね いつもどこか寂しそうで でもそれなのに誰かが傷ついているときは自分のことなんか忘れちゃうくらい優しい人なんだ…」

「不器用で実はとっても泣き虫で だからなのかな… そばにいるとついお世話してあげなくなっちゃって…」

「灯はそういうのはほっとけないもんね」
「…もう、仲もいいんだね」

「本当に…あたしは1学期くらいからずっとその人のこと大好きで…でも決してその想いはその人には伝えることなんかできないんだ…」

「えっと どうして…？」

灯の声が震えているのがわかる

「…だって」

「だってその人は…異性じゃないから…っ」
「……??」

「えっと…それって」
つまりそれは

「そうだよ…あたしは自分が女なのにも関わらず女の子を好きになつた気持ち悪い女で…」

「好きになられてしまったその不幸な女の子は」

「正真正銘…、ゆり…、だよ」

「……!!?」

血の気が一気に引くような衝撃が身体を駆け巡った
首筋を冷たい嫌な汗が流れる…

空を見続けていた視線もばつと灯のほうに向ける
私には、灯がなにを言っているのか一瞬理解できなかった

「…あ…灯？」

隣にいた灯はうつすら目を潤ませて座っていた

「毎朝…ゆりを抱きしめるときはいつも本当に幸せで　ずっとぎゅ
ってゆりを抱きしめていたくて」

「けど…それは決して恋人でも恋愛でもなくて　毎朝変わらずゆり
は親友で…」

「ゆりに会えて、一緒に笑える日々は…本当によかった　うれしく
てうれしくて…」　本当に言葉にできないくらいうれしかった」

「でも…ごめんね　あたし…いつの間にかこんなになっちゃってた

……」

「灯……」

嘘や冗談ではなく

それは… 本当に優しい優しい灯のずっと隠していた真実だった

「今日までずっと親友… に無理矢理なってみただけでもだめだった… あたしはゆりのことが好きで」

「ふと思うといつもゆりのことばかり想っちゃって…」

「ゆりにお弁当作ってあげたり、ゆりと一緒に手も繋いだり、ゆりと一緒にデートしたり…っ」

「授業中も後ろにいるゆりからはどんなふうに自分は見えてるのか… 一人でドキドキしたり」

……

「馬鹿だよね… 気持ち悪いよね…っ どれだけその先のふたりを想像しても叶えられるわけなんて… ないのにさ…っ」

……

今にも涙が溢れそうな瞳や震えながら喋る唇からは、次々と紛れも無い私を想う気持ちが溢れ出していた

それは、ずっと…

ずっとずっと長い間、灯が心の奥底に秘めていた、純粋な少女としての恋心だった

毎日恋を想って触れる灯と、毎日変わらないただの親友だと思って触れられていた私と

（灯…ごめんね）

しかし、あまりに受け止めるには大きな出来事に言葉にはできない

言い方は酷いかもしれないけど、私は灯のことをそんなふうに思ったことは今まで一度もなかったから…

だから、こういうふうすればいいのかも私にはわからなかった残酷なまでに打ち付けられた真実…

もう目の前の少女はただの親友ではなくなってしまった

………

けれど

けれど、だからといってずっとずっと今まで長い間一緒に笑ってきた大切な友達を簡単に切り捨てられるほど自分は弱い人間でもなかった

本当の灯の痛みとは

‘親友を好きになってしまったこと’

だとしたら今私がすべきことは簡単だった

私は涙を必死に堪える強がりな灯の肩にそっと手をやった

そして、そのまま…私より少しだけ大きなその身体を精一杯優しくぎゅっと抱きしめた

（これが灯の言う‘万有引力’なのかな）

「…っ …… ゆり!?」

「気持ち悪いわけないよ？ 灯」

「私のほうこそ 気付いてあげなくてごめんね…」

「…う…っ…っ」

今まで我慢していたのだろうか、まるで灯は子供のように私の胸の中で泣きじゃくった

灯の手は私の腕を強くにぎりしめていた、ブラウスもくしゃくしゃになり、胸にかかる灯の息や涙をすする声が星空の下、小さなベンチに静かに響く

さつきとはまるで逆の立場になって…

「…っ…う…あ…っ」

「もう我慢しなくても大丈夫だから…もつどこにも行かないから」

灯の身体は、どれだけの痛みを堪えてきたのだろう

もしかしたら、私やひよりや有珠ちゃんの痛みよりも遥かに大きかったのかもしれない

………

……

初めて知った親友の想いに、私も堪らず涸れたはずの涙が溢れ出しそうになっていた

しかし、私が今ここで泣いてしまっではいけない

（灯を受け止めてあげられるのは私だけだから…）

そう心に強く語り掛けて溢れ出しそうになっていたものをこらえるそして私は灯にただ一つだけ本当に短い自分なりの言葉を伝えた

本当にありきたりの言葉

「これからずっと一緒だよ 灯」

ありきたりで、心の底から発した決して生涯忘れることのない
本当に大切な言葉だった…

最終話

今思ってみれば

それはなに特別なことなどない、ただどこにでも広がっている平穏な日常の中での出来事に過ぎないことだったのかもしれない
最初に語ったように

私は去年、中三の夏休みに死んだ

…死んだんだ…

それなのに

私は変わらず今を生きている

ただ一つ

…今まで重ねてきた業の代償なのだろうか

気がつけば…死体のような温もりの持たない身体になって

こんな身体で…本物の友達などできるはずがない…

半年前、桜の咲く季節

冷静に悟ったように無気力にそう思ってこの女子高に入学してきた
しかしそんな考えを一瞬にして忘れ去らせるような、私の中ではビ
ックニユースよりもっと凄い出来事が起こった

それはこの学校に入学してすぐのこと

最後列に座る

人見知りで内気で泣き虫な、どこか冷めたネガティブ思考な私
その前に座る

愛想がよくて元気で陽気な、青春が似合いそうなポジティブ思考な灯

全く対象的なふたりは何のへんてつもない日常の中で出会った

表では、けなげにいつも一緒に笑ってきたふたり
しかし、裏では15歳にして深い痛みを背負ってしまったふたりだ
った

表面的には親友だったふたりには、それ故にこそ絶対に知られては
いけない秘密があった

けれどお互いが仲良くなればなるほど、その裏の顔も相手にじわり
じわりと近づいていった

そして今日、9月6日

双方の痛みを引き出して交わったとき、涙が溢れて途方に暮れたとき
ふたりを救済へと差し延べたものもまた、双方の痛みだった

痛みなくして人の痛みを知ることとはできない
痛みなくして幸せを知ることとはできない

痛みがあるから幸せというものを感じ
孤独をかいま見たからこそ、そこにいる仲間というものも大切しよ
うと思える

それは紛れも無い

私が経験した、この短くて長かった突拍子もなく流れていった一週
間というありふれた何不思議となくあり続けた日常の中で得た
ほんの小さな奇跡みたいな出来事だった

痛みは私を傷つけ、泣かせ、苦しめようとする

けれど、その痛みで私は

案外笑うこともできるらしい

そしてそれは、ひとつの真実へと繋がった

.....

……

私の胸で泣きじゃくっていた灯も今はようやく落ち着きふたりはベンチで肩を寄り添い合って座っていた

「ねえ ゆり？」

「なに？」

「さっきのあれって その…あたしと付き合ってくれてるってことでオツケーなのか？」

「えっ！？ あ あつと…それはその… ごめん」

落ち着いたと思った矢先、さっきまであんなに泣いて弱々しい姿だったなんて思えないほど平然としたいつもの灯がそこにはいた

「むーっ なんだよ… さっき‘ずっと一緒だよ灯’なんてあたしに言ったくせに」

「い、いや それはなんていうか その… うう だって…」

「だって？？ だってなんさ？」

（うー こいつ、すっかり攻めキャラに戻ってるし…っ）
というより、痛みを隠さなくなった分 前よりひどい気がする

「だ、だって私 今まで恋愛とかには無関係だったし いきなり…
それで それもまさか灯に愛の告白なんてされるなんて思ってもみ
なかったし」

けれど、灯の顔をまじまじと見ると前とは違いなぜか意識してしまう
久しぶりに見れた灯のうれしそうにくしゃっと笑う大好きな笑顔
ぴよこんと外ハネした栗色の柔らかいショートボブの髪
まだ少しだけ腫れた綺麗な瞳

ちよっとだけ甲高い子供みtainな声も、柔らかい灯の安心する匂いも

全部ずっと今まで私に好意を寄せてきたんだと思うと、どうしても無性にドキッとしてしまう

（灯は今までずっとこんな気持ちだったのかな）
そう思うと自分でもわかるくらいに頬つぺたが染まってい

「あれえー？ ゆり照れてんのー？？ ニヤリッ」

「う、うるさいっ／＼」

灯はうれしそうにからかうような声でそう言うと、私のほうに上半身だけ覆いかぶさるように、まるで甘えるようにぎゅーっと身体を寄せてきた

「ゆりい…可愛いよう／＼ すりすり」

「…っ／＼／」

灯の顔が近すぎて息がかかるのがわかる
視線が離せないっ／＼、まさにゼロ距離

「…な、何て言うか 同性との恋愛ってひよりが読むような漫画の中のだけのようなことだっと思ってたりしてたから その…／＼」

恥ずかしくてまともに目の前の灯の顔が見られない自分がいた

「やっぱり ゆりはひよりのほうが好きなのかあ…うう」

「ち、違うよっ どうしてそういうことになるのっ」

ひよりの名前を出しただけで私の胸でちょっとだけシュンといじける灯にまたドキッとしてしまう

（可愛い…かも）

なんだろう、友達としてではなくこういう新しい灯の一面を見ると、ついいじりたくなってしまう

（たぶん、いつもの灯もこういう気持ちなのかな）

「なら キスしてー」

「っ！！？」

シユンとしていたと思うと、今度は灯はさらにぐいつと私に覆いかぶさって顔を突き出して目を閉じてきた

「だ、だめだよっ／＼ それは…さすがにできないから／＼」

「どうしてー?? 今ならこの灯様をゆりだけが好き勝手してもいいんだあー?」

「そ、そんなこと… できないよう／＼」

ちよつとだけ喜びそうになってしまった自分がいた

「むーっ … だったら」

「だったら??」

今度はまた何かひらめいたようにゼロ距離でぎゅっと寄せていた身体をいきなりガバツと離れたと思うと

「だったらあたしはゆりに交換条件を主張するっ！」

「交換…条件??」

落ち着いたと思ったら、この子はまたいきなり何を言い出すんだろう

「そうっ 交換条件！」

「ゆりやあたしをこんなに泣かせた原因 この街のどっかにいる通り魔をあたしが捕まえてやんよーっ」

「…??? えっと なんの話??」

「だからっ ゆりの悩みの通り魔を捕まえる代わりに、もしホントに捕まえたらお礼にあたしと付き合ってー」

「い、いや なんかもう言ってることがめちゃくちゃだけど

それこそ無理だよ… そんなの…」

「ふえ? どうして?? やっぱり… やっぱり… そんなにあたしと

付き合いたくないのか…?? …ウルウル」

「それは…そうじゃない　というかそっちじゃなくてっ／／」

「通り魔捕まえちゃうぞ作戦のほう？」

「そう　そっちっ　…　たかが灯みたいな女子高生一人がただでさえ
今　何十人と警察が追っている通り魔を捕まえることなんてできる
はずないじゃん」

「誰があたし一人だなんて言った？」

「…??？」

「あたしには頼もしい仲間が三人もいるんだおーっ」

「三人って…??」

「ひよりにいー　有珠にいー」

「あれ…もう一人は？」

「なに言ってるんさ　もちろん　ゆりしかないでしょー」

(……………)

「…あの灯さん…これ　交換条件じゃなくないですか？」

「えー　でも捕まえればゆりがもうビクビクしなくて済むし、その
身体を治す方法もわかるかもしれないんだよー？」

「それは　そうかもだけど」

「それにさ…」

「それに??」

灯のふざけた声のトーンがいきなり真剣なときの声に変わる…

「なんだか　今なら負けない気がするんだ…　このままはったりや
夢じゃなくて、めっちゃ手を伸ばせば届きそうな気がするんだよね

」

「…??？」

「あたしたちはこのままなら…この街に負けたままな気がするから」

…負け、確かに私たちはそうかもしれない

「だから 全部この街もひっちゃか散らかして巻き込んで一発やってみようよっ」

「…全部？」

「ゆりはこのまま逃げてていいの？ もしゆりがこのままビクビクしながら実際に捕まったときに後悔しない？」

「傷つくことなんか恐れてたら この先ゆりはなんにも勝てないよ？」

「勝つとかは別に…」

どうせまた灯の勢いだけのはったり事だと思っていた

「あたしたちは敗者だよ… でも今からでもそれは絶対変えることができる、でもそれは誰もは味わえない滅多にない今しかないチャンスなんだよ？」

「チャンス…なのかなあ」

「人の勝ち負けは負けた者が負けで終わらないから… どれだけの挫折や情けなくてぶざまな人間でも」

「うん…」

「その先を どれだけ早く起き上がって行動できるか、どれだけあがいて歯を食いしばって抵抗してみせるか、本当の勝者と敗者の違いだとあたしはそこだと思う」

どうしてこの子はこんなに今を必死になっているんだろう…

「あたしたちは…負けてないっ これからあがけば勝てるってあたしは信じてるっ」

「だからさっ！ この街にっ」

「“世界一の悪あがきで逆らおうよ”」

…っ！

わからない

ただ灯が私に向けたその言葉には本当に灯なら変えてくれそうな強いなにかがあった気がした

冷めていた心を撃ち破るようにビビッと伝わる衝動

こんな生活を、本当に変えれそうな何かがあった

新たな世界の入口が間近に迫っているような気がした

「…わかった 私も参加する」

不安のほうに圧倒的に大きい

けれど、それより今は今を仲間と変えてみたいと、ささやかにこの胸に何かワクワクするような期待に近いなにかが身体を震わせていた

「うん」 あ、それでー 交換条件だから」

「あっ… うん」

「もし捕まえたら あたしと付き合ってほしいっ それと… キスも… してほしいっ」

「わ、わかった もし捕まえれたら… ねっ／＼」

「よっしゃーっ やってやんよー！！」

（…ビクッ！？）

そう言っただけいきなり灯は立ち上がると

天高く腕を掲げ、夜空へと高らかに声を響き渡らせた

（灯なら本当に叶えてしまいそうで怖い）

「恋も青春も遊びも 全部勝ち取ってやるー」
「えつと うん」

「よし じゃあ誓いの証に指切りしよー」

「指切り…？ なんか子供みたいだね」

私は立ち上がった灯に小指を差し出した

「ノンノン ゆり君 違うんさー 小指の指切りは子供るときまで
っ」

「えつと…」

私は首を傾げた

目の前の灯はなぜか薬指を差し出していたからである

「あのにえー 指切りはにえ」

『 親指の指きりは 男の誓い 』

人差し指の指きりは 秘密を守る 、『 また会う日まで 、『 友情の証 』

中指の指きりは 絶対裏切らない 』

薬指の指きりは 永遠の誓い 、『 愛の誓い 』

小指の指きりは 小さな約束 』

「つて言っんさ」 だからあたしたちは薬指で指切りっ」

「へえー なんか初めて知ったかも…」

子供のころにやった小指同士の指切りや掛け声はなく

ただ二人 夏の夜空の下、静かに薬指を強く結んだ

このとき、始めて私は青春というものに憧れを抱いた

これから始まる、私たちの戦いへ
これから始まる、私の…私たちの

‘弱者の反撃へ’

淡い期待と不安の混ざった気持ち
私たちの少し遅いこれから始まる夏

「んじゃ もうめっちゃ夜だしそろそろ帰ろつかあ 痛みの同士に
依存しあい平和と陽気を奏でる、あたしらのあの空間へー」

「そうだねっ」

「ひよりと有珠のことだから どうせまだあの教室で待ってるかも
だしにえー」

「そういえば灯？」

「なんらー??」

「灯が通り魔を捕まえるの、ひよりや有珠ちゃんも仲間だって言っ
てたけど二人には了解済みなの??」

「ううん 全然っ だって今さっき思いつきでゆりに話したんだし
」

「えっと…それって二人は承諾してくれるのかなあ…」

「絶対大丈夫っ あの二人ならっ」

「…根拠は？」

「現にこうしてあたしらを助けようとしてくれたこと」

「…わかった」

………

……

ずっと長い時間座っていたベンチから立って、灯の自転車の後ろの荷台に乗せてもらう

直ぐさま、自転車は夜道へ車輪を前へとゆっくり回し動き始める

遠ざかってゆくお世話になったあの古いベンチに心の中でそっと別れを告げた

学校へと戻る帰り道

自転車のタイヤから伝わる振動とともに、前に自転車を漕ぐ灯の背中の中が温もりが本当に優しく

灯に気付かれないようにそっと灯の背中にもたれかかる……

「ゆり 冷たいね……」

「ごめん……」

「ううん でもなんか あったかいよ……」

「……うん」

「ありがとう……灯」

前には、だんだんと学校の校舎が見えてくる

こんな時間、明かりなど点いているはずないと思っていた

けれどふたりの見た光景は

4階の隅の教室だけ蛍光灯の光を教室いっぱいに発し、私たちの自

転車からもばつちり見えるほど、星空以上に黄色い光を放っていた
教室

それはまるで、ボロボロなふたりの帰りを優しく待っていたかのよう
なあったかい目印だった

最終話（後書き）

これで まぐる剣士 1部 は終わりです
続編は書き終わり次第 載せます

読み終わってみて感想など いただけたらうれしいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0460k/>

まぐろ剣士 -弱者の反撃-

2011年3月21日23時16分発行